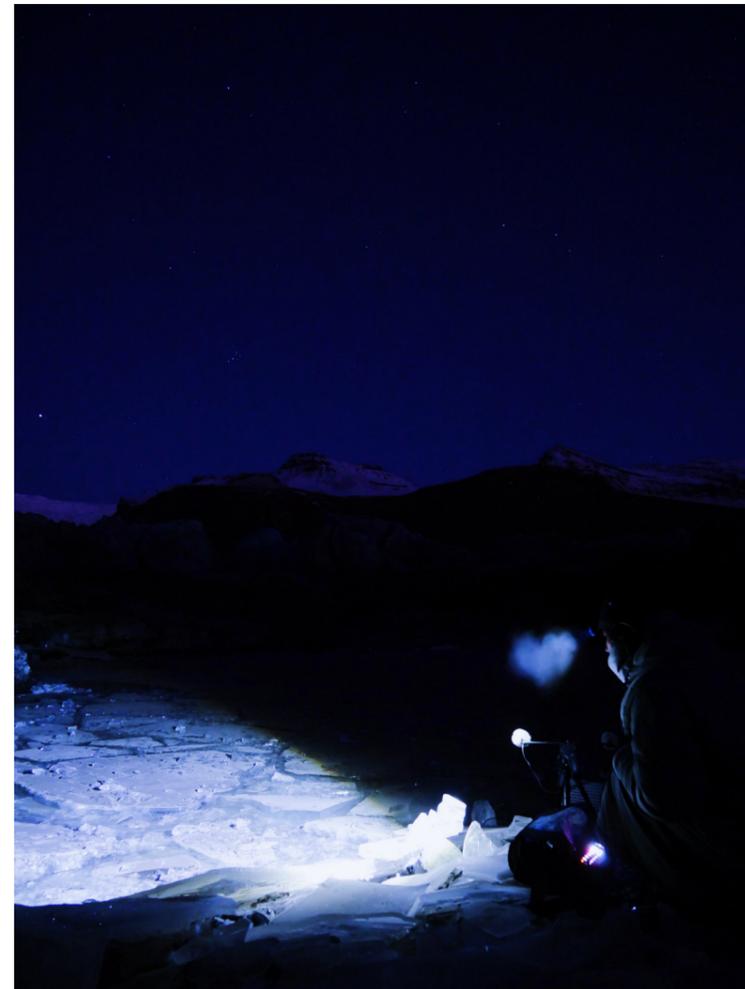


東日本大震災と津波は、上村がフィールドレコーディングを本格的に作品に取り入れるきっかけとなった。巨大地震と津波によって、自然と人間の活動との間に新たな関係性が再思考された。さらに福島原発事故により、現代の生活システムが既に崩壊していることも認識された。上村は、人間が本来持つ身体感覚でそれらを感じ取るため、地球の環境に耳を傾けようとした。

近年では、地球温暖化の影響を強く受ける北海道・知床の流氷、フィンランドの古代氷河痕跡の基盤岩、アイスランドの氷河地帯などをフィールドレコーディングし、音響インスタレーションや音楽作品、サウンドパフォーマンス、ドローイング、映像、絵画などの素材として活用している。

上村は自身のフィールドレコーディングを「瞑想的な狩猟」と名付けた。音を録音しながら長時間聴き続けることは瞑想的であると同時に、自分が録音したい音を求めて他人の土地に入ることは狩猟のようなものだからだ。



Field Recording

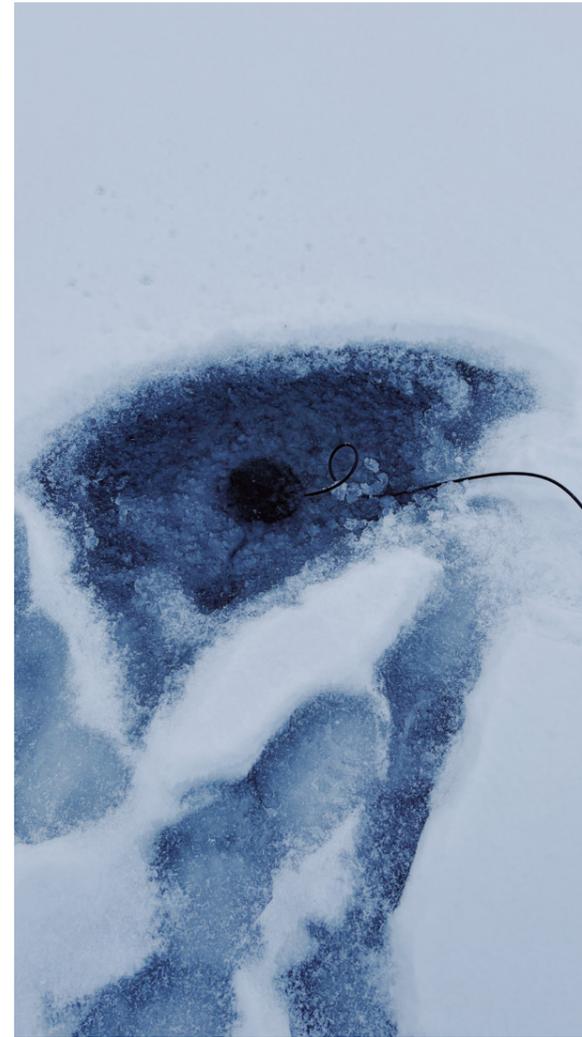
ジャカルタでのフィールドレコーディング (2026)



ヘルシンキ、バルト海でのフィールドレコーディング (2026)



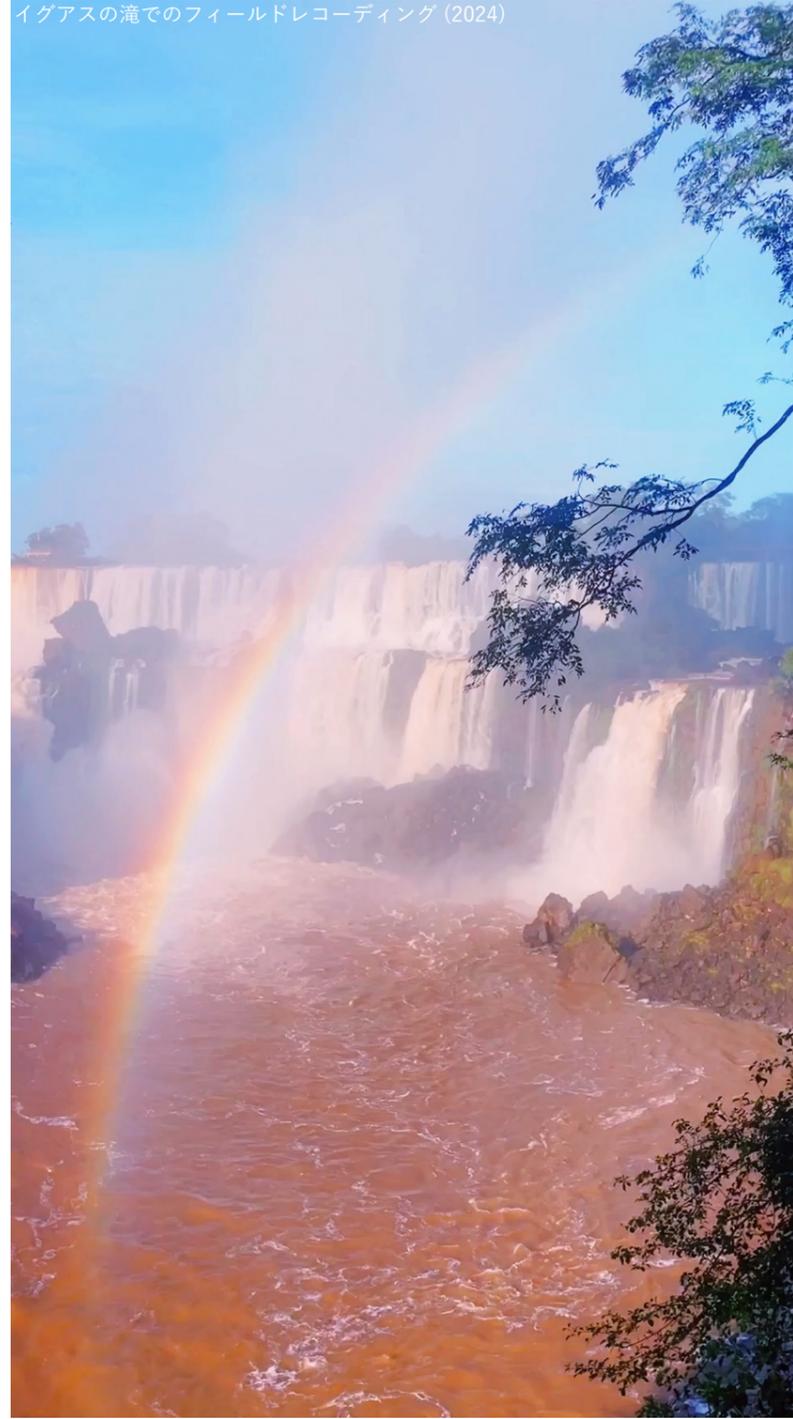
上村はジャカルタの活気ある音風景を録音した。Vincent Ruijters との共同プロジェクト「クリムゾン・ギルト」は、オランダ、インドネシア、日本の間で展開された植民地化の歴史的・文化的・政治的文脈を探求する。上村の録音は魚市場周辺の環境と、そこで働く人々や子供たちに焦点を当てている。



フィンランド、ヘルシンキの凍った海でのフィールドレコーディング。バルト海は凍っている時はいつも静かで安定しているが、水中の音は穏やかな音だけでなく、風が氷を動かす時には活発な音も立てる。

Field Recording

イグアスの滝でのフィールドレコーディング (2024)



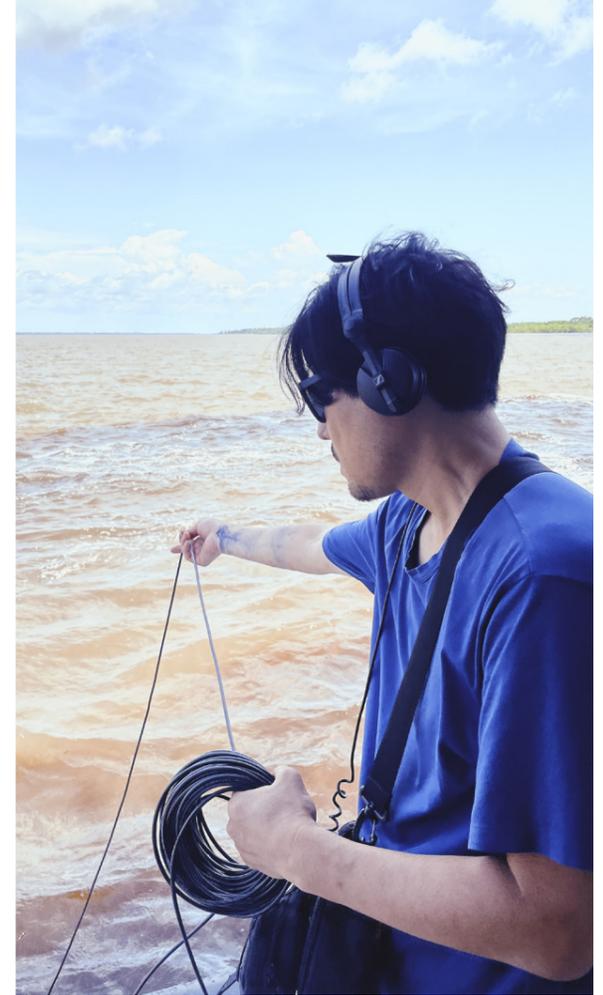
アマゾン熱帯雨林でのフィールドレコーディング、マナウス、ブラジル (2023)



バルビーナダム、マナウス、ブラジル (2023)



リオ・ネグロ川のレコーディング、マナウス、ブラジル (2023)



上村は2023年夏、ブラジル・マナウスで開催されたレジデンスプログラム「LABVERDE SPECULATIVE ECOLOGIES RESIDENCY 2023」に参加した。このプログラムは、国際的なアーティスト、先住民のルーツを持つブラジル人アーティスト、現地の科学者、活動家、哲学者らを集め、環境問題や地球の生態系に関する知識、文化、芸術を共有する場となった。プログラム期間中、上村はアマゾン熱帯雨林、バルビーナダム、アマゾン川でフィールドレコーディングを実施した。アマゾンの湿気が蒸発して雲となり、熱帯雨林に雨をもたらした後、再び空へと戻ることによって形成される「Flying River - 空飛ぶ川」と呼ばれる広大な雲海は、この生態系の象徴的な現象である。これらの地域は経済・政治のグローバル化といった人間活動の影響を強く受け、急速な環境破壊に晒されている。

また、2024年に上村はアルゼンチン・イグアスでLABVERDEとAWASIが共同で立ち上げたプロジェクト「AWASI ART WEEK」に参加。世界最大の滝であるイグアスの滝とその周辺水環境のフィールドレコーディングを実施した。アマゾンと同様にイグアスも多様な生態系と大規模な水循環を宿しており、水という普遍的な物質への認識を深める契機となった。

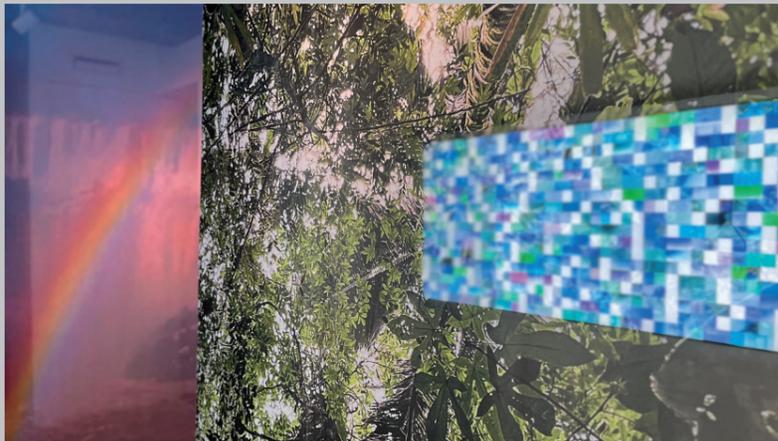
Waterforest

2025

hakari contemporary, 京都

サウンドインスタレーション (4.1ch), フィールドレコーディング, シフォン布にイメージ, 旅先で手に入れた物

URL: <https://vimeo.com/1095913054>



この作品は、上村が世界各地で録音した多様な水の音を中心に据えた音響インスタレーションである。特にアマゾン熱帯雨林で観測される「空飛ぶ川」と呼ばれる広大な雲海に着想を得ている。この現象は、熱帯雨林から蒸発した膨大な水分が空中で雲となり、雨となって再び森林を潤すという壮大な自然循環を表している。作品には、知床の流氷、アイスランドの氷河、アルゼンチンのイグアスの滝、スイスアルプスの湧水、京都の下を流れる琵琶湖疏水、そして満月と新月の時期に世界中の海で録音された音源など、多様な場所で収録された音源が組み込まれている。上村が旅先で撮影した写真、各地で収集した工芸品や自然物と組み合わせることで、このインスタレーションは、人間の作り出した空間と時間の境界を超え、絶え間なく動き続ける水のイメージを提示する。対立や分断を超えた循環の豊かさ、自然と人間の深いつながりを表現している。

Sound Installation

Floating Life

2022
トキョーアーツアンドスペース, 東京
サウンドインスタレーション, 水彩ドローイング, 印刷物, 観葉植物, タオル 偏光シート, 石, 照明, スピーカー, 音
URL: http://www.yoichikamimura.com/works/Floating_Life.html



個展「awai」は、2022年東京にて開催された「水路から柔い空へ | From a Dusky Canal to the Pale Blue Sky」 TOKAS クリエイター・イン・レジデンス 2022 展の一部である。上村は 2021 年、フィンランド・ヘルシンキの HIAP レジデンシーに参加した。

本サウンドインスタレーション「Floating Life」には、数年にわたり世界各地で収録した様々な音、特にオホーツク海の流氷の音、北極圏に位置するフィンランド・イナリ村の凍った川の音、ヘルシンキのテンペリアイオキ教会でオッリ・アーニと共に行ったサウンドパフォーマンスの録音などが含まれる。

インスタレーションの音風景と繊細な光は、観客を没入的な瞑想の時間と空間へと誘う。また展示されたドローイングの複製は、旅の記憶と断片を提示している。

[コンセプト・ダイアグラム]

フィンランド、北極圏の環境



フィンランドの風景
- 群島
- 空のグラデーション
- 柔らかな光と色彩



ヘルシンキ、フィンランドの岩の教会における
フィールドレコーディング&コンサート
- 氷河期に古代の氷河によって形成された基盤岩
- かつての氷河の記憶としての環境音

サウンド
&
視覚的要素

古代の氷河の記憶



ドロージングシリーズ "Pelagos"
フィンランドと流氷の間の混在する風景

サウンド
&
視覚的要素

気候変動による
流氷の減少の音

連想 / 関連性:
上村にとって、フィンランドの群島の風景と知床の流氷は
重なり合い、新たな風景を生み出した。
さらに、フィンランドの空の柔らかなグラデーションと穏
やかな光は、瞑想的で環境的なものだった。

流氷



オホーツク海の流氷
- 浮遊する氷
- 気候変動
- 流氷の音

地球温暖化
気候変動

サウンドインスタレーション "Floating Life"

瞑想的な庭——人々が環境と生態系について考え、感じ、想像するための場
||
グラデーション、没入型、サウンドインスタレーション

冷たき熱帯、熱き流氷

2021

コラボレーションプロジェクト, サウンドインスタレーション, ミクストメディア

Copyright: Yoichi Kamimura + Seiha Kurosawa

URL: http://www.yoichikamimura.com/works/Floating_Between_the_Tropical_and_Glacial_Zones.html



今日、地球温暖化など自然環境をめぐる地球規模の問題は、国境を越えて広く注目を集めている。これらの問題は、地域の生態系に関する自然科学的な視点のみならず、強く政治的・経済的な観点とも結びついており、現代の芸術表現にも大きな影響を与えている。

「冷たき熱帯、熱き流氷」は、新たな環境的視点を目指した共同リサーチと創作のプロジェクトである。本プロジェクトには、北海道大学と協働してオホーツク海の流氷に関するリサーチと作品制作を行ってきたアーティスト・上村洋一と、ブラジル・アマゾン地域のアートプログラムに参加したキュレーター・黒澤聖覇が携わっている。

「冷たき熱帯、熱き流氷」は、上村が録音した流氷の音と、黒澤が録音したアマゾン熱帯雨林の音を組み合わせ、そこに上村のドローイングを加えて構成されたサウンド・インスタレーション作品である。没入的なサウンドは、流氷の海や熱帯雨林に独り身を置いたときの身体感覚や感情を観客に追体験させようとする。



さらに、同タイトルのスノードーム作品は、上村の流氷の記録や黒澤のアマゾンにおける写真記録、そして両者が共有した風景の記憶をもとに制作されたものである。その内部には、流氷の下からアマゾンの森が生えてくるという架空の光景が描かれている。その光景は、スノードーム特有のメルヘン的で温かな雰囲気をもとながらも、同時に気候変動によってもたらされる荒涼とした冷たい世界をも想起させる。

[コンセプト・ダイアグラム]



Breathe You

2020

水戸芸術館現代美術センター, 水戸

サウンドインスタレーション (6.1ch), 蛍光塗料, ブラックライト, 植物育成 LED ライト, スピーカー, サウンド

URL: http://www.yoichikamimura.com/works/Breathe_You.html

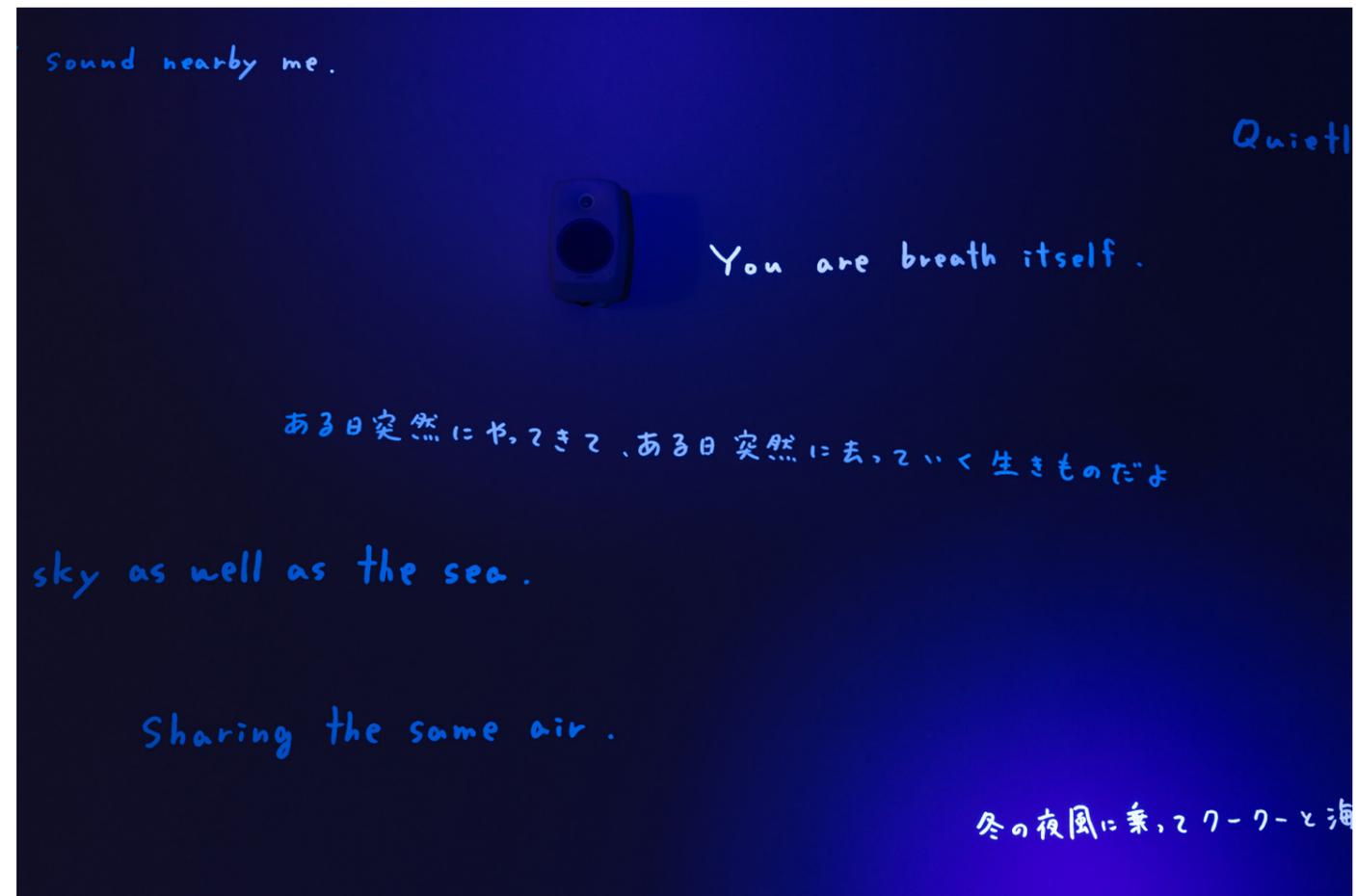


上村洋一は、風景を視覚や聴覚を通して捉える方法を模索し、世界各地の環境にフィールドレコーディングを介してアプローチする。そして、そこで得られた素材や概念をもとに、インスタレーション、絵画、サウンドパフォーマンス、サウンドアートなどを制作している。2019年より知床半島で行ってきたフィールドレコーディングでは、流氷にまつわるさまざまな現象を通じて、人間と自然を包括するボーダーレスな生態系を探し求めてきた。

《Breathe You》は、流氷の海でフィールドレコーディングを行った際、暗闇の中で人間世界の外側を感覚した体験に着想を得ている。作家は、流氷によって生じる多様な環境音や海洋生物の音に、人間の呼吸音や口笛を混ぜ合わせ、かつては耳にすることができた「流氷の歌う」現象を再現しながら、空間全体を瞑想的なサウンドスケープで満たす新たなインスタレーションを制作した。

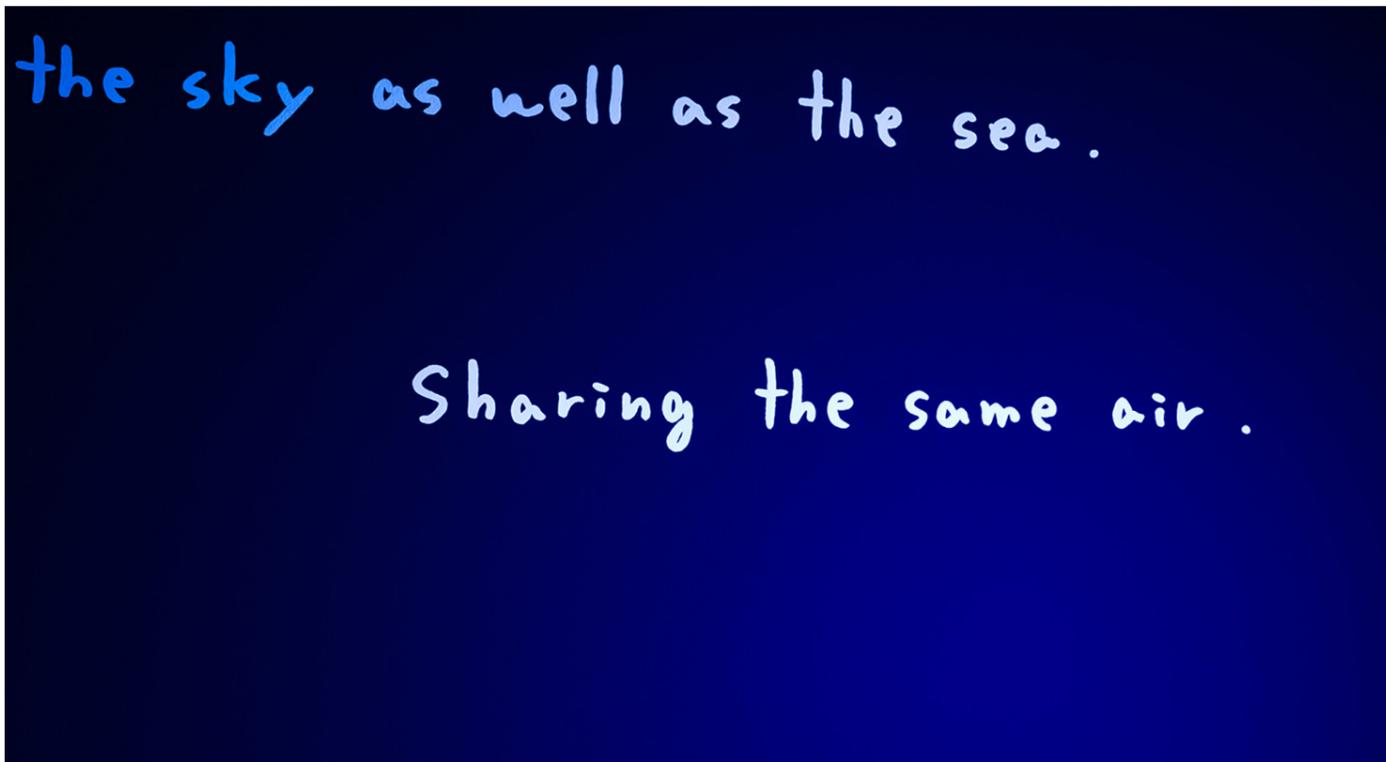
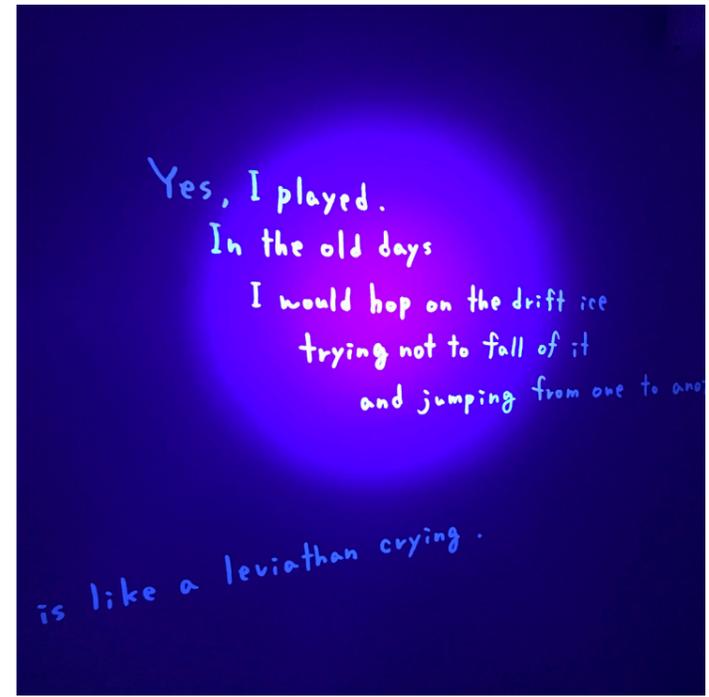
これは、氷の隙間から空気が押し出されることで発生する現象である。しかし、海の流氷の減少により、この「歌う」音を耳にする機会は減り、知床においてさえほとんど知られていない。地域の人々が記憶する流氷の音から、存在しないその音を掴み取ろうとすると、私たちの呼吸は、流氷の隙間から押し出され放たれる空気と同期するかのようであり、呼吸するために体内に取り込み、再び吐き出す空気の生々しい感覚を伝えてくる。

この感覚は、人間の営みに伴う代謝が気候変動を通じて流氷を融かしているという、不確かな不安感なのだろうか。それとも、呼吸という人間に不可欠な現象さえ、他の生物によって生み出された酸素によって成り立っているという、私たちの内に存在する非人間的なものへの自覚なのだろうか。これらの問いの答えは、人間と自然世界との間に横たわる不安を孕んだ境界にある。そして、私たちが日常で当然のものとして享受している空気のような存在と人間とのあいだに現れる両義的なつながりにこそ、人間と自然のエコロジカルな未来を見出すことができるに違いない。



Breathe You

2020
水戸芸術館現代美術センター, 水戸
サウンドインスタレーション (6.1ch), 蛍光塗料, ブラックライト, 植物育成 LED ライト, スピーカー, サウンド
URL: http://www.yoichikamimura.com/works/Breathe_You.html



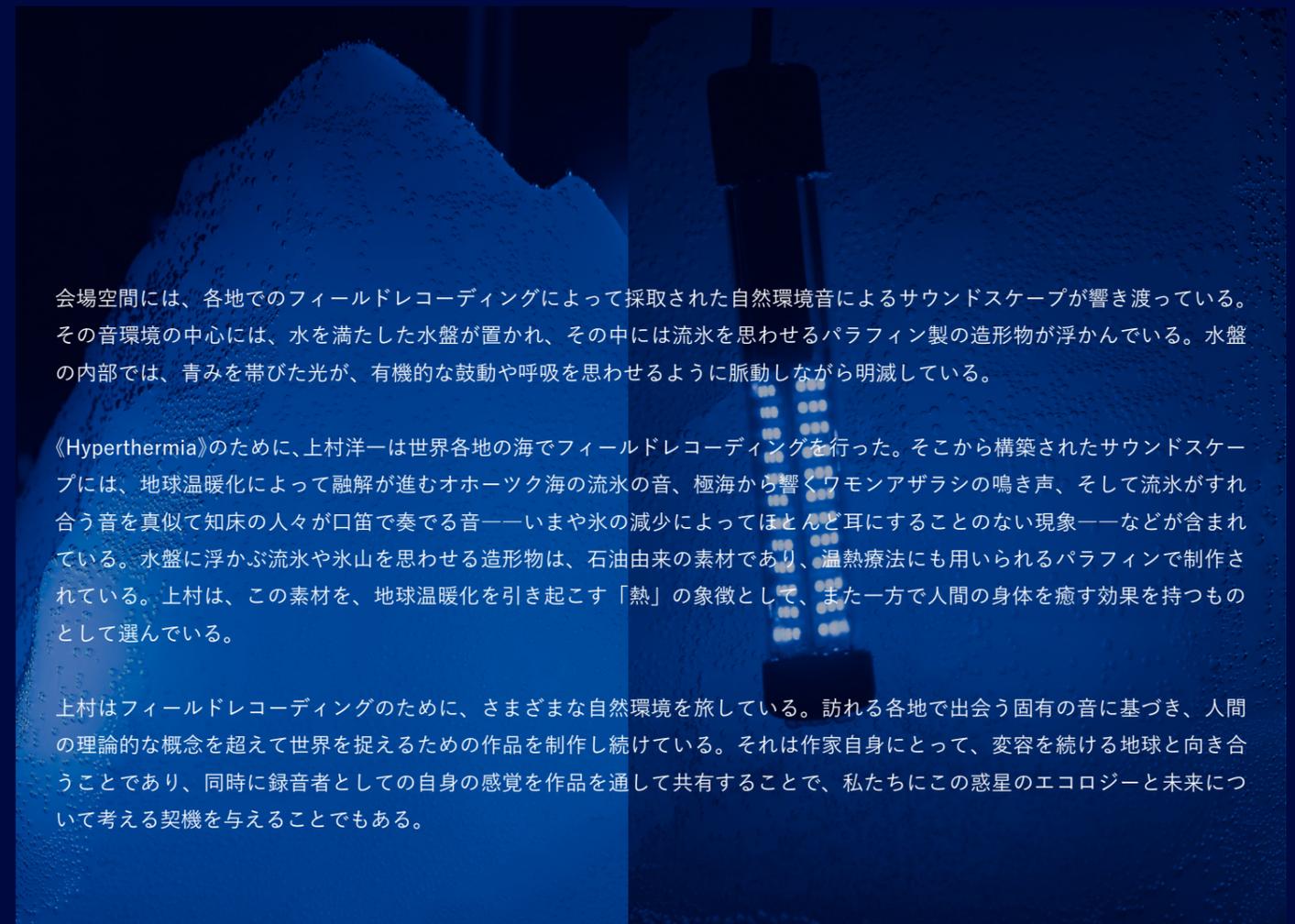
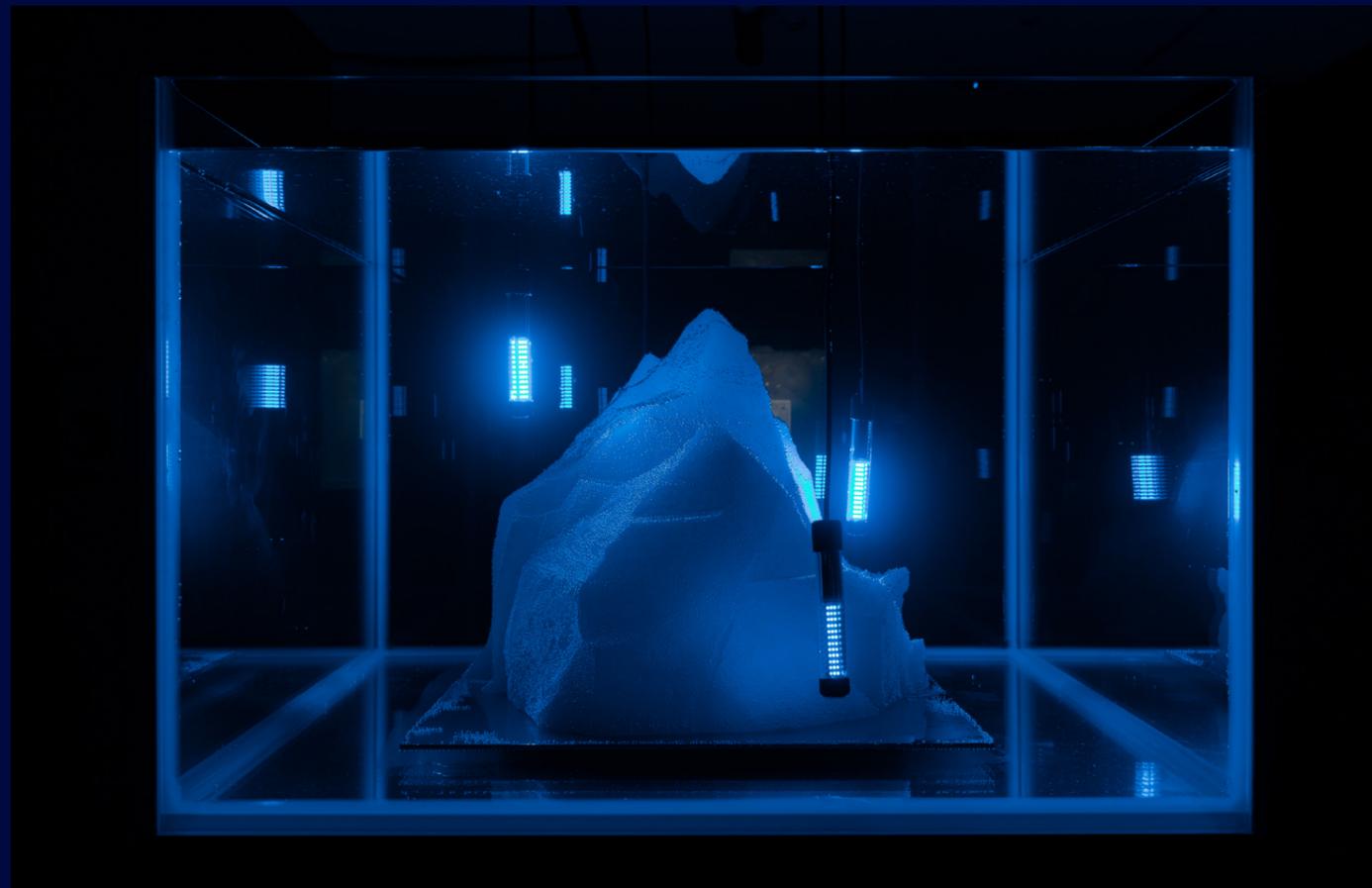
Hyperthermia

2019

NTT インターコミュニケーション・センター [ICC], 東京

サウンドインスタレーション (4.1ch), パラフィンワックス, 水槽, 水, ステンレス板, 漁業用ライト, PVC フィルム, スピーカー, 音

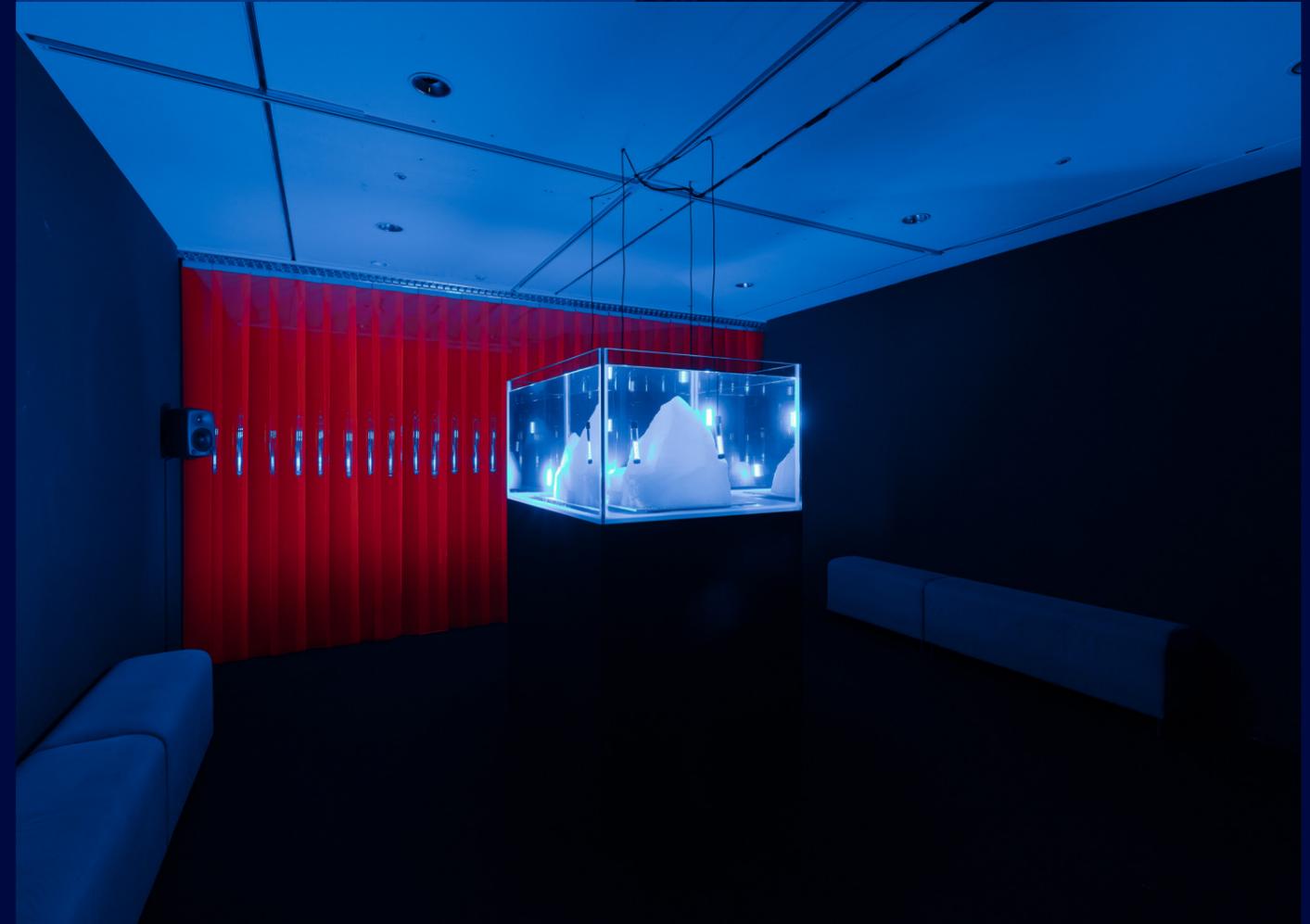
URL: <http://www.yoichikamura.com/works/Hyperthermia.html>



会場空間には、各地でのフィールドレコーディングによって採取された自然環境音によるサウンドスケープが響き渡っている。その音環境の中心には、水を満たした水盤が置かれ、その中には流氷を思わせるパラフィン製の造形物が浮かんでいる。水盤の内部では、青みを帯びた光が、有機的な鼓動や呼吸を思わせるように脈動しながら明滅している。

《Hyperthermia》のために、上村洋一は世界各地の海でフィールドレコーディングを行った。そこから構築されたサウンドスケープには、地球温暖化によって融解が進むオホーツク海の流氷の音、極海から響くワモンアザラシの鳴き声、そして流氷がすれ合う音を真似て知床の人々が口笛で奏でる音——いまや氷の減少によってほとんど耳にすることのない現象——などが含まれている。水盤に浮かぶ流氷や氷山を思わせる造形物は、石油由来の素材であり、温熱療法にも用いられるパラフィンで制作されている。上村は、この素材を、地球温暖化を引き起こす「熱」の象徴として、また一方で人間の身体を癒す効果を持つものとして選んでいる。

上村はフィールドレコーディングのために、さまざまな自然環境を旅している。訪れる各地で出会う固有の音に基づき、人間の理論的な概念を超えて世界を捉えるための作品を制作し続けている。それは作家自身にとって、変容を続ける地球と向き合うことであり、同時に録音者としての自身の感覚を作品を通して共有することで、私たちにこの惑星のエコロジーと未来について考える契機を与えることでもある。



[コンセプト・ダイアグラム]

免疫系を構築し、治療する



イトテルミー療法

免疫力を高める

悪性リンパ腫

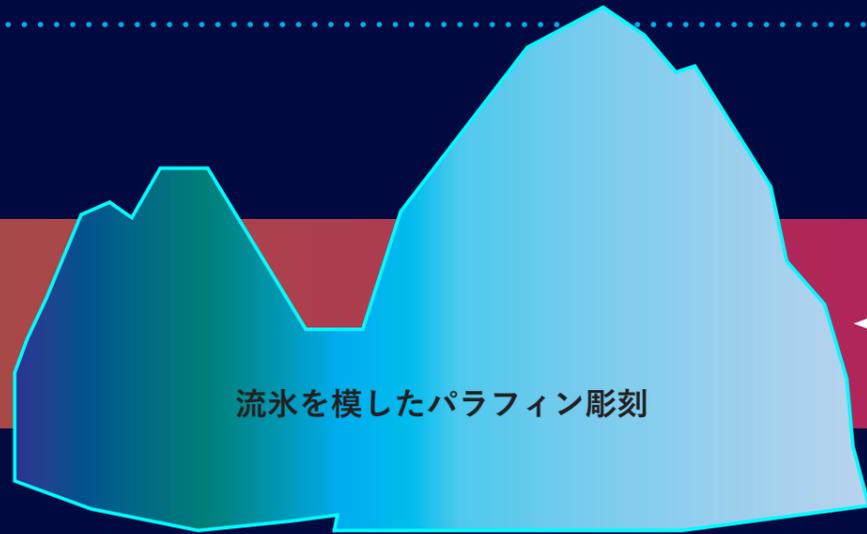
免疫力を高める



パラフィン浴

熱

熱



流氷を模したパラフィン彫刻

パラフィン



温熱療法のために

= 身体環境を整える

石油由来物質

= エネルギー消費と熱放出

地球温暖化を加速させる

地球温暖化を加速させる



地球温暖化

熱エネルギーと生命の保護の象徴

動物性脂肪



ヨーゼフ・ボイス作品

フェルトとワックス



phantom power

2019

サウンドインスタレーション / 流水を溶かした水, グラス, 金属板, スピーカー, 音

MARUEIDO JAPAN, 東京

URL: http://www.yoichikamimura.com/works/phantom_power.html



この作品では、水を満たしたさまざまな種類のガラス容器が金属板の上に並んでいる。その水は、上村が2019年2月から3月にかけてオホーツク海で流水のフィールドレコーディングを行った際に採取した流水を人工的に溶かしたものである。時折、外光が床に反射し、透明な佇まいが展示空間に静謐な風景を生み出す。しかし、水面を覗き込むと、振動によって生じたかすかな波紋が見える。これは、流氷同士がこすれ合い崩壊する過程で生じた低周波音を、上村が海中でハイドロフォンや水中マイクを用いて録音したものである。

この低周波は人間の可聴域を超えており、はっきりと聴き取ることはできない。しかし、ガラスの中に現れる波紋は、人間の知覚の尺度を超えたとしても、流水の緩やかな（かつての）崩壊の視覚的な痕跡を語っている。

《Phantom Power》というタイトルは、録音時にマイクに電力を供給したファントム電源に由来する。この電流はごく微弱ではあるが、微細な音の変化を捉えるマイクを作動させるために不可欠なものだ。電源にちなんで名付けられたこの作品は、私たちが普段は気づかない、生活世界の深層で現に（かつて）起きている内部崩壊や変化の兆候とエネルギーを、鋭敏な知覚を可能にする「電源」として見るよう訴えかけている。



[コンセプト・ダイアグラム]

Phantom Power:

"ファントム電源"とは、マイクが録音中に電力を供給する電源システムを指す。この電流は極めて微弱だが、微細な音の変化を捉えるよう精密に調整されたマイクを動作させるために不可欠である。

認識できないものとして

人間の聴覚範囲外にある低音域

地球における環境変化（特に都市部以外）は認識が難しい

フィールドレコーディング

流氷の音

流氷

流氷による水の振動

展覧会:

ほとんどの美術展は現代生活が営まれる場所で開かれる

遠く離れた場所で起きている地球規模の環境変化を想像する

地球温暖化

流氷から溶けた水

地球温暖化により、流氷の数は年々減少している。

知床の流氷:

流氷の海は地球温暖化の影響を受け続けている。こうした自然環境の変化は、都市部から離れた場所でもより顕著に観察され、都市部での日常生活では認識しにくい。

Kōri no ryokō / Jäämatkailu

2025

Publics、ヘルシンキ、フィンランド

アルバム・リリースイベント organized by Publics, サウンドパフォーマンス with Olli Aarni



PUBLICS は、上村洋一と Olli Aarni を招き、スロバキアのレーベル mappa から限定プレスのヴァイナルレコードおよびデジタル形式でリリースされた彼らの新しいコラボレーション作品『Kōri no ryokō / Jäämatkailu』のライブ演奏を行う。このコンサートには、以下の水域からの録音が含まれる：オホーツク海（知床）、琵琶湖疏水（京都）、テルメ・ヴァルス（Vals）、聖ベネディクト礼拝堂（Graubünden）、Juutuanjoki（Inar）、Vantaanjoki（Vantaa および Helsinki）、そしてスオンテー湖（Joutsa）。



Spacetime

2025

Helsingin kaupungin Talvipuutarha, ヘルシンキ

サウンドパフォーマンス



上村は、Spacetime Helsinki が主催する Spacetime Journaling セッションに関わっている。彼はセッションの中で、水を主題とした約1時間のアンビエント・トラックと氷の音を参加者のために演奏する。Spacetime Journaling では、人々は自分の心が求めることを自由に行うことができる。書くこと、描くこと、考えること、あるいはただ呼吸することも歓迎されている。

[Sound Performance](#)

サウンドパフォーマンスツアー with Olli Aarni in Finland

2023

ポルヴォー美術館、ポルヴォー／カラスアタマ・セリエパヤ、リッカルディンカドゥン図書館、ヘルシンキ、フィンランド

サウンドパフォーマンス



Kalasadaman seripaja



Rikhardinkadun kirjasto



Porvoo Taidehalli

2021年以降、上村はフィンランドのサウンドアーティスト、オッリ・アーニとの友人関係と継続的な協働関係を維持し、フィンランドでのコンサートツアーへと結実した。ポルヴォー美術館、ヘルシンキ中心部のリッカルディンカドゥン図書館、そしてヘルシンキで開催された the Under The Leaf Art Book Fair の関連イベントとして、上村は自身のドローイングブックも展示しながら、各会場でサウンドパフォーマンスを行った。各会場では、上村とアーニは現地のアーティストと共同でパフォーマンスを発表した。

Snow Therapy

2024

CONTRAST, 東京

サウンドパフォーマンス



写真家ティモシー・ランブレックの個展「スノーセラピー」のオープニングで行われた音響パフォーマンス。雪景色をフィールドワークする彼の作品に呼応し、知床の流氷とアイスランドの氷河から収録した環境音と電子音を融合させた音響が展示テーマを彩った。



Sound Performance

Ambient November

2022

Space Odyssey, レイキャビク, アイスランド

サウンドパフォーマンス



上村は 2022 年から 2023 年の冬をアイスランドのレイキャビクで過ごし、同国の氷河と火山に関するフィールドワークを行った。その期間に録音した環境音を素材に、レイキャビクのレコード店「スペース・オデッセイ」でソロコンサートを開催した。



echo of Temppeiaukion Church

2021

サウンドパフォーマンス / フィールドレコーディングプロジェクト

Temppeiaukion Church, ヘルシンキ, フィンランド

コラボレーション: Olli Aarni

URL: http://www.yoichikamura.com/works/echo_of_Temppeiaukion_Church.html



かつてスカンジナビアを覆った巨大な氷河は、地表に溝を作り出し、それを磨いた。氷河は約1万年前に後退し、モレーン、ドラムリン、エスカー、無数の湖など多様な地形を残したとされている。その中でも、ヘルシンキのテンペリアウキオ教会の岩盤は極めて独特である。

この教会は巨大な岩をくり抜いて造られており、内壁には露出した岩盤の空洞部分が見られる。この岩盤空間は音響効果が極めて優れており、音響技師マウリ・パルヨの助言のもと、そのままの状態でも現在も使用されている。また岩盤表面には氷河の痕跡を観察できる。この建築は氷河の記憶を留める音響建築と言えるだろう。

上村は、岩盤を伝う水滴の音、音響エコー、建築物の振動など、記憶を集めるための教会の環境音を録音した。また 2021 年 11 月 16 日には、フィンランドの音響アーティスト、オッリ・アーニとのコラボレーションを教会内でコンサートイベントとして開催した。



Music for Environment

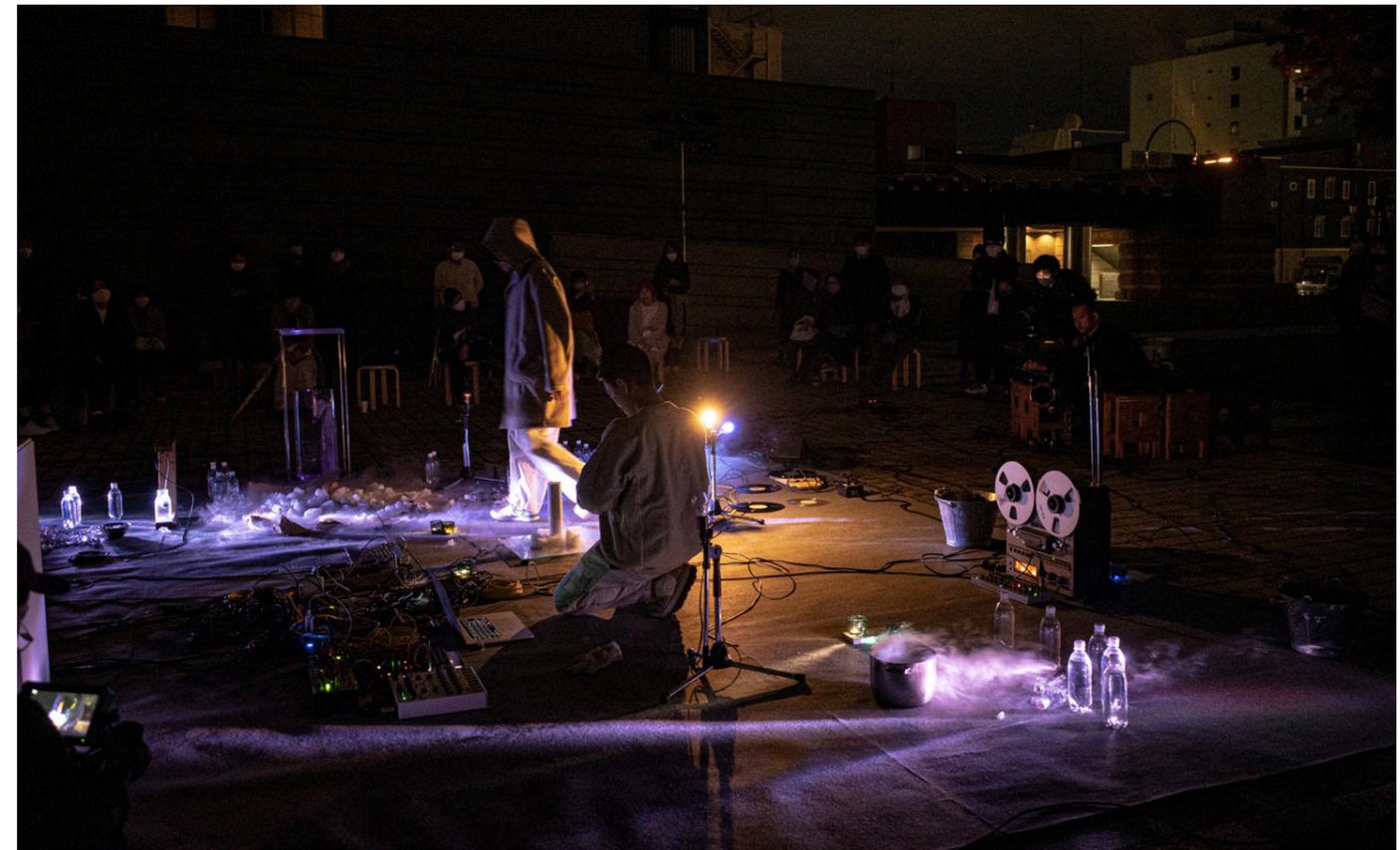
2020

サウンドパフォーマンスイベント

水戸芸術館現代美術センター, 水戸

Organized by Music for Environment, 水戸芸術館

URL: http://www.yoichikamimura.com/works/Music_for_Environment.html



「道草展：未知とともに歩む」関連プログラム

Music for Environment

[Sprout sounds, Resonate scapes]

芽吹く音、
揺れ拡がる風景

2020.11.3
TUE 17:00-19:30
水戸芸術館広場 雨天：水戸芸術館広場回廊

梅沢英樹＋上村洋一＋小金沢健人
蓮沼執太／INOYAMALAND／
校母木一徳(DJ)

水戸芸術館
ART TOWER MITO

様々な芸術・文化イベントが COVID-19 の影響を大きく受け続ける中、音楽の分野もまた、予測不可能な変化と共存できるよう、その形態と役割を進化させざるを得ない状況にある。水戸芸術館では「道草展：未知とともに歩む」の併催プログラムとして「環境のための音楽」を開催した。本企画は激変する世界において、私たちを取り巻く「環境」と「音楽」の関係性を再考するものである。3組のアーティスト／音楽家のパフォーマンスを通じ、音と空間に対する多様なアプローチや感性を提示し、その共通点と相違点を観客に提示することを目指した。「聴く」という行為を通して、動き続ける環境の現実を感じながら、未来の領域に新たな音楽の礎を築く冒険を、観客と共に歩んでいきたいと考えている。

transcribe (Ananias Correia dos Santos I)

2025

ライトボックス, アクリル絵具, Ananias Correia dos Santos による言葉

2000 × 1000 × 150 mm



このライトボックス絵画作品は、作家がアマゾン滞在中に行った、アマゾナス州観光ガイド協会顧問であり、またアマゾン民族環境開発研究所 (Ipdeam) 所長を務めるアナニマス・コレイア・ドス・サントス氏へのインタビューに基づいている。インタビューにおいて彼は、水が人間の生命にとってのみならず、人間社会、すべての生き物、そして地球そのものにとってもいかに不可欠であるかを語った。また、アマゾンには水にまつわる豊かな知識、儀礼、祭りが存在しており、先住民の視点からすれば、気候変動のような現象さえ地球の自然な循環の一部として捉えられていると説明した。

作家はその言葉の中から特に強く響く部分を抜き出し、それをモールス信号へと翻訳した。遠く離れた誰かに宛てられたそのメッセージは、さらに色と光のパターンへと変換され、言語の限界を超えて、雰囲気や感覚を伝達する方法として提示されている。

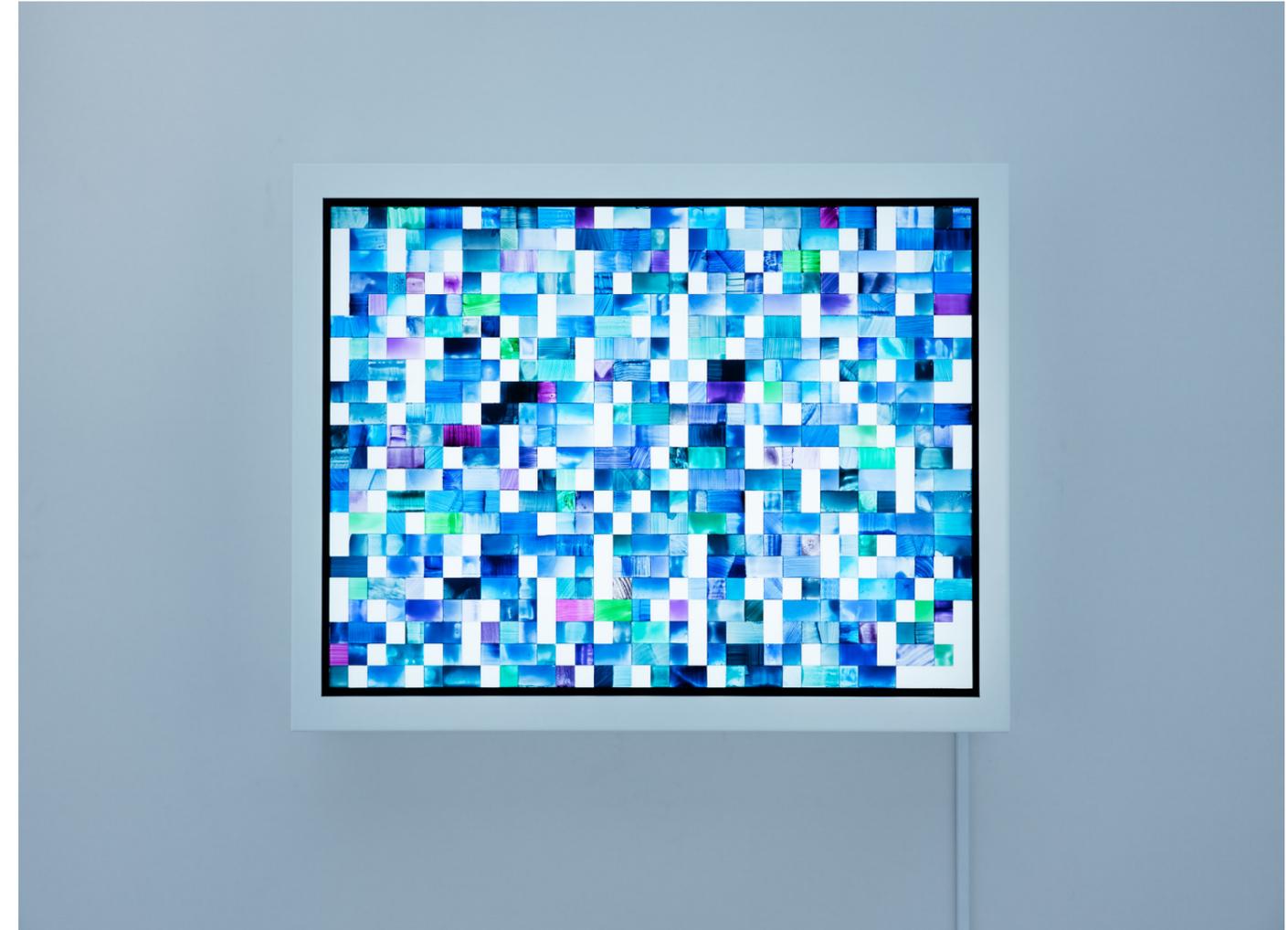
「水がその循環を持つように、人間もまた自らの循環を持っている。私たちは自らの循環の中で無限であり、水のように連続する流れである。それは死の後においても、この聖なる大地の上で続いていくのだ。」

transcribe (Ananias Correia dos Santos II)

2025

ライトボックス, アクリル絵具, Ananias Correia dos Santos による言葉

950 × 650 × 150 mm



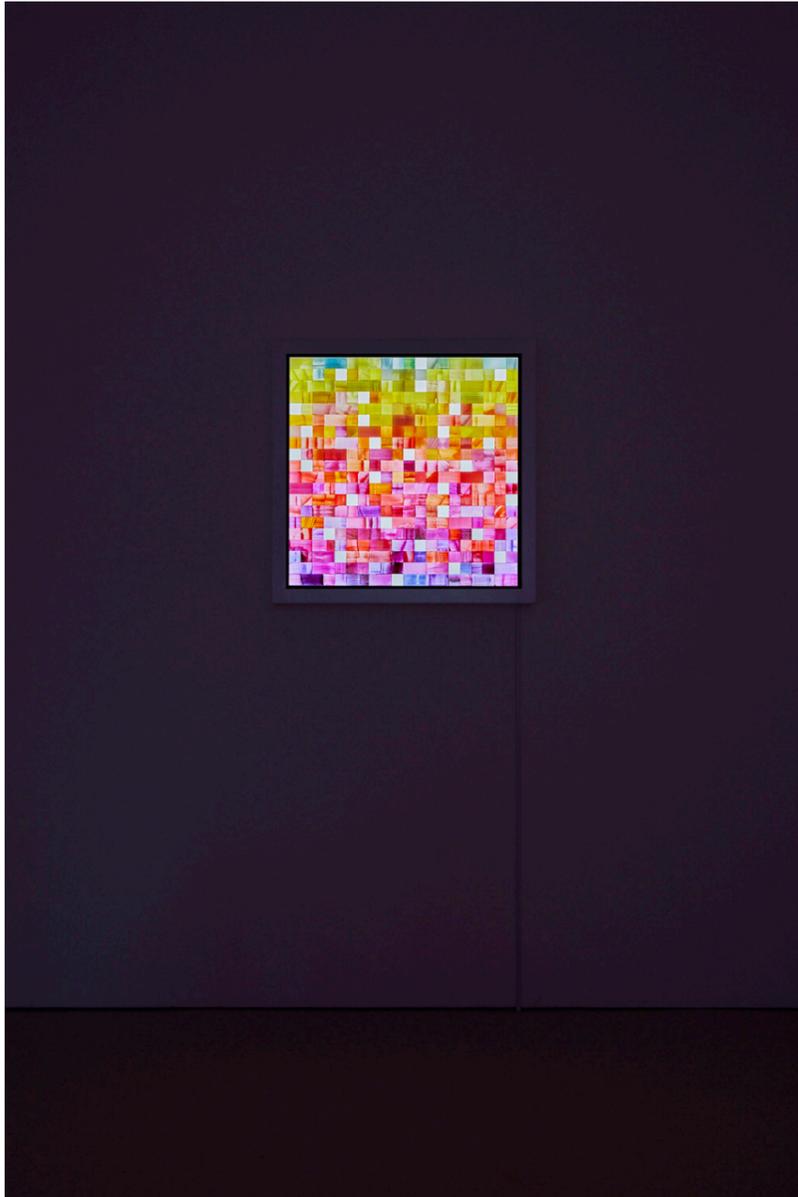
「YPORA = 水はあらゆる次元において、人間の存在に対する自然の補完物である。水は私たちを生命の輪につなぎ、宇宙的なエネルギーと叡智を授けてくれる。」

transcribe (298s)

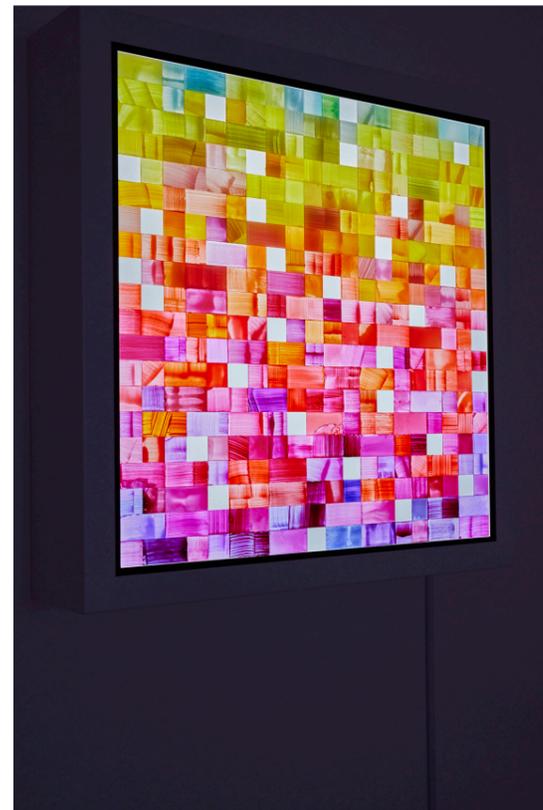
2022

ライトボックス, アクリル絵具

700 × 700 × 150mm



作品「transcribe (298s)」は、サウンドインスタレーション「Floating Life」の298秒間の音響データから、298種類の色彩パターンを二進数に変換したものである。これらの298種類の光と色彩のパターンには、毎秒ごとに音源の振動変化がもたらすランダム性が含まれている。



transcribe (265s)

2021

ライトボックス, アクリル絵具

700 × 1800 × 150mm



上村は、自然環境とは自然と人工の境界があいまいな領域であると考えている。フィールドレコーディングによって記録された環境音はデジタルデータでありながら、有機的に聴こえる。

作品《transcribe (265s)》は、265秒間の流氷の音源の振動変化のランダム性を1秒ごとにバイナリへと転写し、265種類の光と色のパターンとして構成されている。

正の数(+1)と負の数(-1)によってそのパターンを图像的に表現することで、流氷の音の揺らぎや瞑想的な雰囲気視覚的に示している。



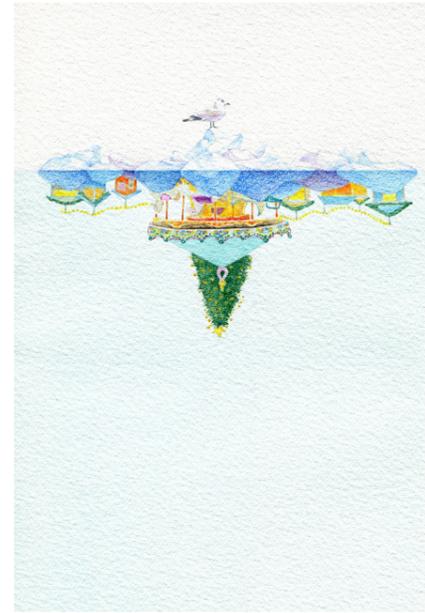
Drawing

Pelagos

2021-

水彩, 色鉛筆, 鉛筆, 紙

180 × 125 mm



フィンランドの空は、高緯度に位置するため、とても低く広く見える。淡いピンクやオレンジの色合いが溶け合い、頭上にグラデーションをつくり、その光は柔らかく優しい質感を帯びている。その空の下では、大小さまざまな島々が群島をなし、カモメたちは飛ぶことに疲れるとその翼を休める。これらの島には、趣のあるカフェや教会、サウナが建っている。内海であるためか、水面はとても穏やかで、風のない日にはまるで鏡のようになる。

なぜかこの風景は、遠く日本北部・知床沖のオホーツク海に広がる流氷を思い出させた。おそらく、目の前の群島がオホーツク海に浮かぶ流氷の板状の姿と似ていたからだろう。もちろん流氷の上にカフェやサウナがあるわけではない。だが、フィンランドの海の岩島に人々の生活のかすかな痕跡を感じ取り、それは地球温暖化の影響を受ける前の知床における人々の暮らしを思い起こさせた。かつて人々は流氷の上を歩き、焚き火を囲み、宴を開き、はしゃぎ回っていたのである。

フィンランドの風景とオホーツク海の風景は私の心の中でおぼろげに重なり合い、新たな風景の心象が立ち上がり始めた。その過程は、きわめて個人的な連想ゲームのようであった。

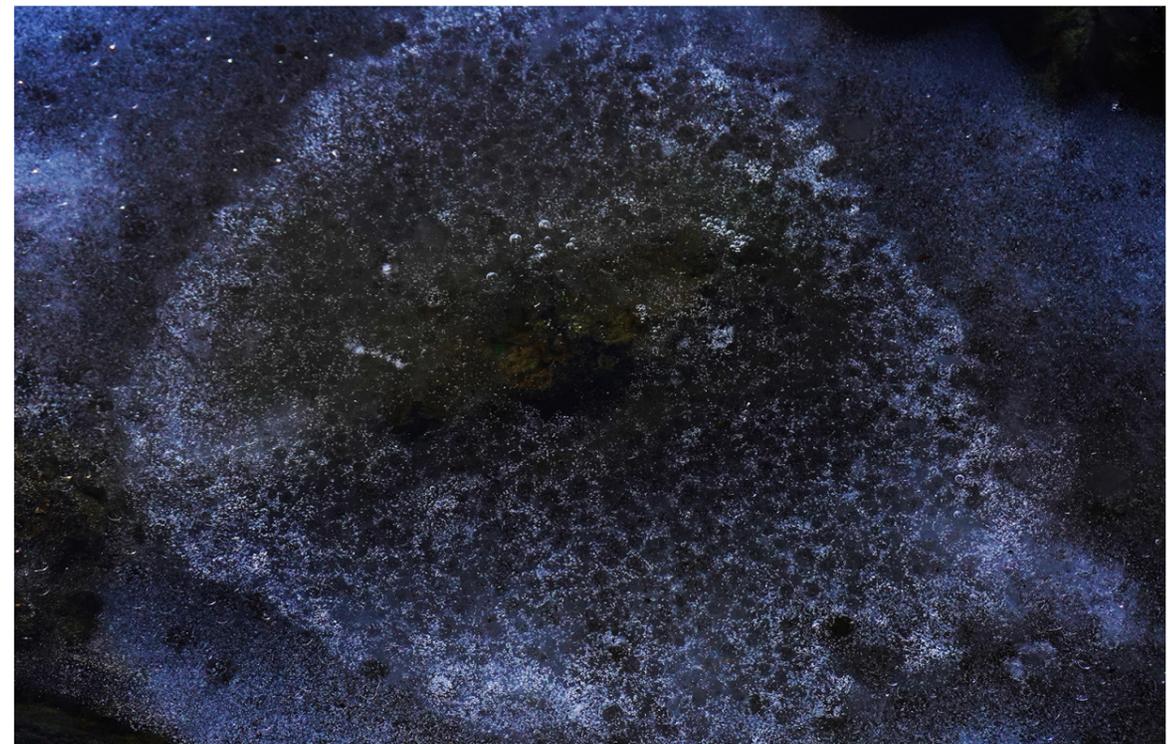
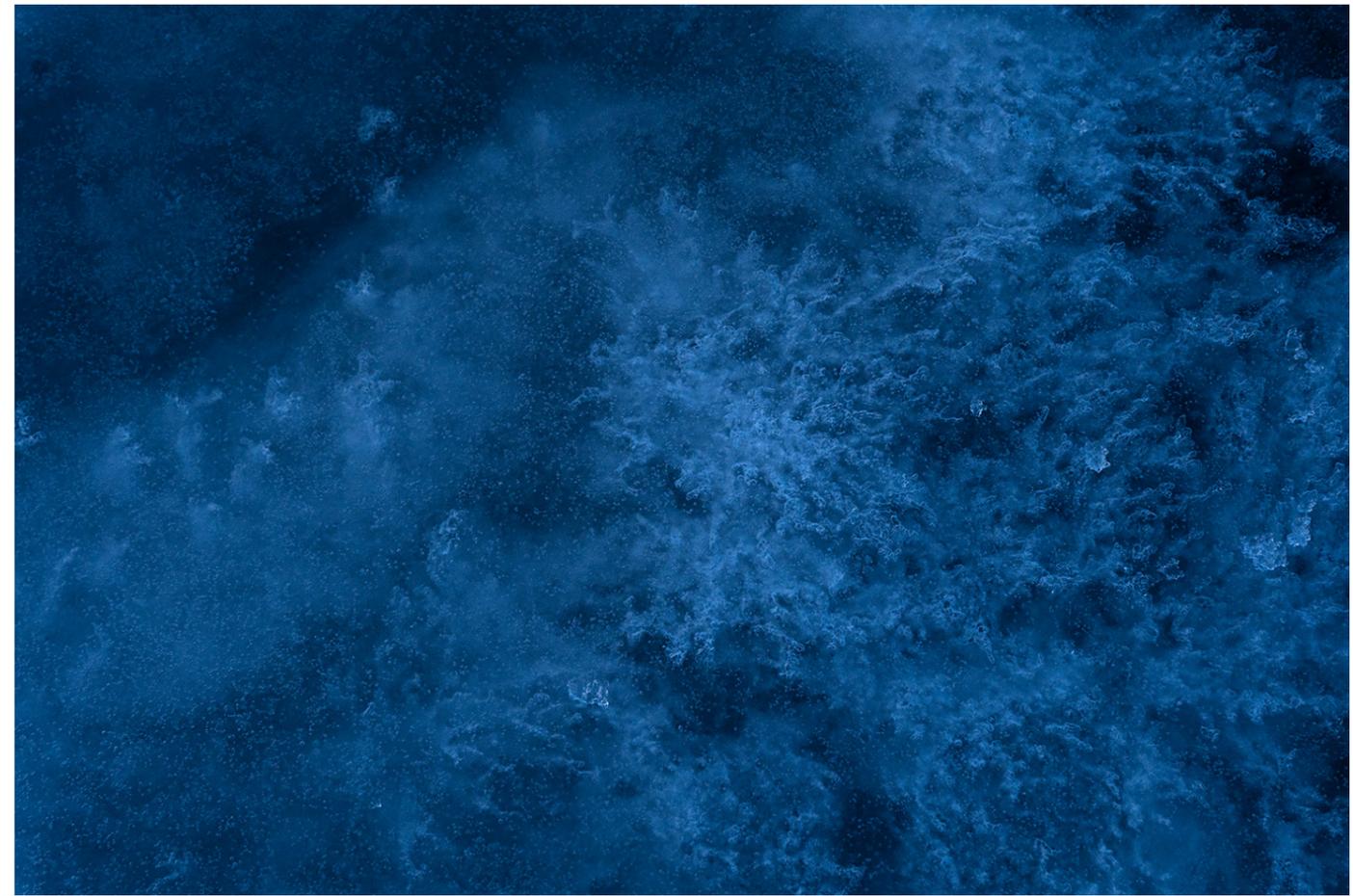


internal weather

2021

ラムダプリント, 額装

600 × 400mm 各



上村が毎年流氷の録音に訪れるウトロの岩場「三角岩」は、通常は流氷で覆われており、岩肌が見えることはない。しかし 2021 年の冬には、雪も氷もほとんどなく、ごつごつとした黒い岩肌が姿を現していた。

岩の間を歩きながら足元を見ると、そこには流氷が融けてできたシャーベット状の水たまりがいくつもあった。その中を覗き込むと、大気中の雲の動きや宇宙における星々の現象のようにも見えた。地球温暖化によって年々減少していく流氷の中に、壮大な気候変動が宇宙的スケールで現れているのだと感じた。

Thermo-cruising

2021

ラムダプリント, アルミマウント, 額装

230 × 230mm

Copyright: Yoichi Kamimura + Seiha Kurosawa



本作はトーキョーアーツアンドスペース本郷で開催された展覧会「冷たき熱帯、熱き流氷 (Floating Between the Tropical and Glacial Zones)」の一部である。

アマゾンとオホーツク海において、舟は重要な交通手段である。本作では、上村と黒沢が各々乗船した舟の船首からの眺めを反転させ、左右に並置することで、熱帯と流氷という対極的な世界の視界を幾何学的な構成として提示している。そこにはグラフィック的な統一感や、舟旅に共通する記憶が感じられる一方で、両者は正反対で分断された熱的体験を内包している。

no human, no nature

2019

アンティーク絵葉書、流氷の融解によって生じた水、額装

1700 × 1130 mm



この作品は、オホーツク海の流氷を写したさまざまな種類の絵葉書を収集し、その同じ海の流氷を融かした水によって、絵葉書に印刷された流氷の風景を消し去ることで制作された。絵葉書に写された流氷の写真は、かつて確かにその場所に存在していたことを物語っている。しかし、絵葉書に記録された風景が今日も同じであるかもしれないし、まったく変わり果てているかもしれない。この地域の変容は気候変動によるものであり、自然環境の変化は人類の時間軸を超えた環境的循環の一部である。しかしながら、その環境変化は人間社会が放出するエネルギーの影響でもあるだろう。

自然に人の手が不可避免的に加わっていく様を捉える上村は、絵葉書に描かれた流氷の風景を、融けた流氷の水で強制的に脱色することで、絵葉書上の風景が人工的に消去される過程を、劣化しゆく流氷の未来と、人工的な「自然の生態系」双方の暗示として提示している。

Drifting Scenery

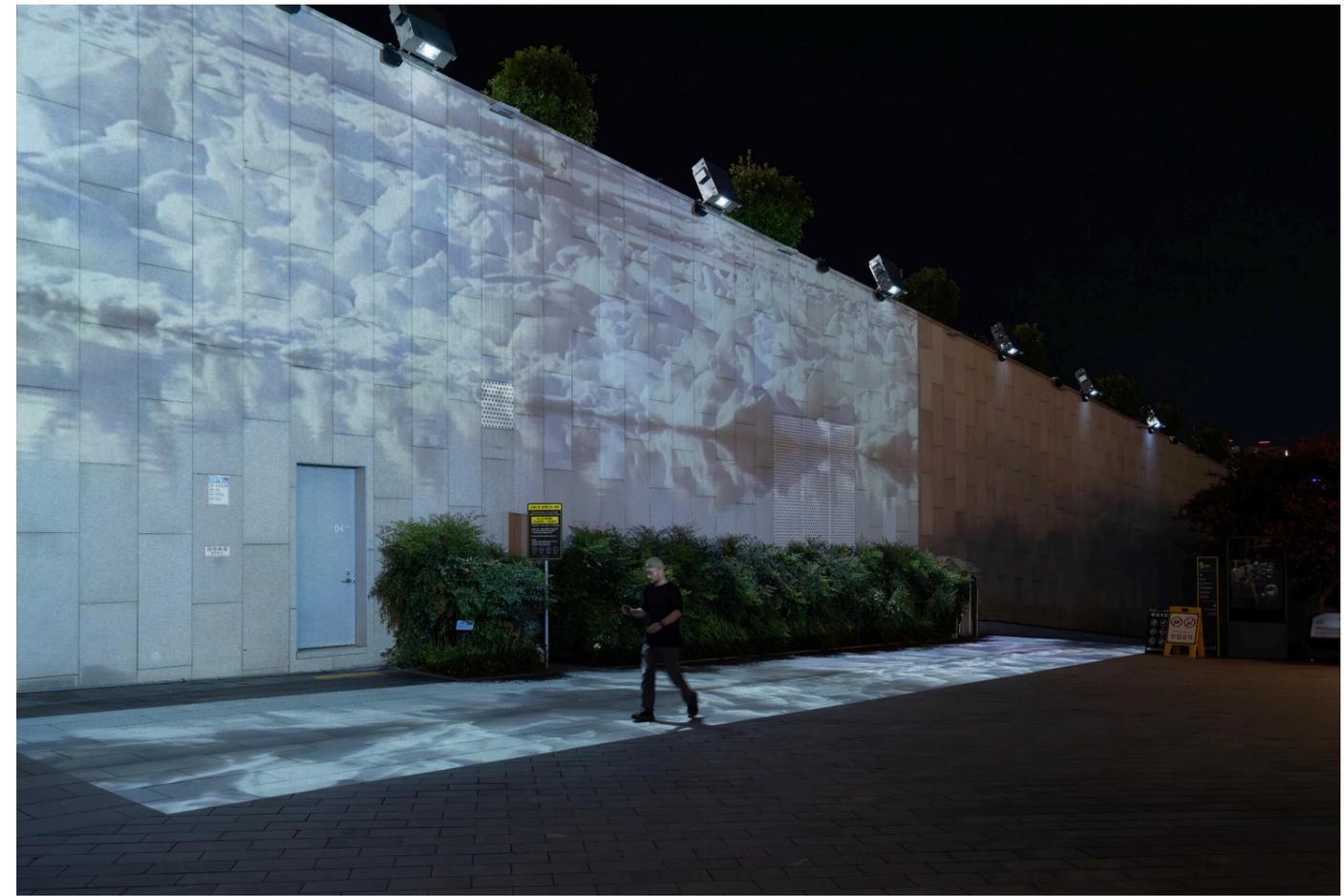
2023

Asia Culture Center(ACC), 光州, 韓国

マルチチャンネル・ビデオ, サウンド, 12min

Artists: PARK Hyunjung, 上村洋一, 西野壮平, 小金沢健人, KWOK Colleen

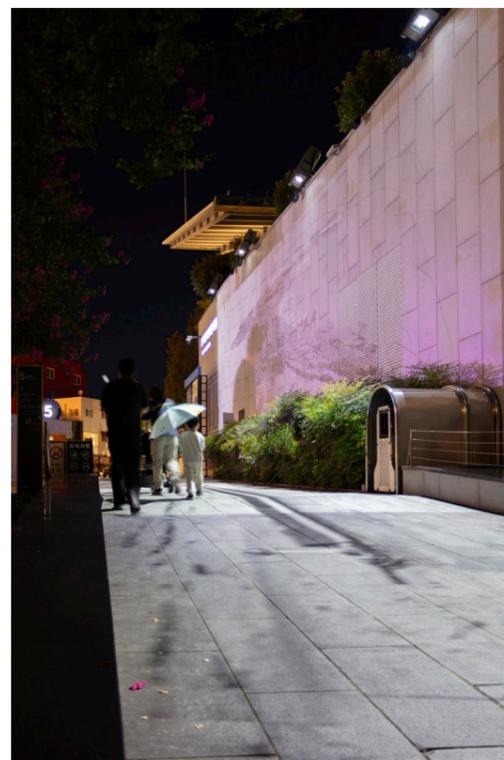
URL: <https://www.acc-exhibition.com/collection/drift-collective/?lang=en>



DRIFT Collective は、流氷観察のための探検に参加したアーティストたちによって結成されたグループである。毎年冬になると、ロシアのアムール川から流氷が生まれ、北海道・知床地域の海へと漂着する。この自然現象はもともと日本の漁村・斜里で目撃されてきたが、地球温暖化により徐々にその姿を消しつつある。

マルチチャンネル映像インスタレーション《Drifting Scenery》では、近年にわたり記録された知床における流氷の風景、氷の周囲の音、そして束の間の流氷シーズンに現れる知床の姿が提示される。ACCのファイヤーロードを流氷の風景で覆うことで、来場者は流氷の消失を仮想的に体験できる。

気候危機によって変容する自然現象を記録した作品を通じて、アーティストたちは人間と自然との相互関係を改めて考える契機を提供することを目指している。



eat the air

2020

映像 10:19

札幌国際芸術祭 2020(SIAF), 北海道

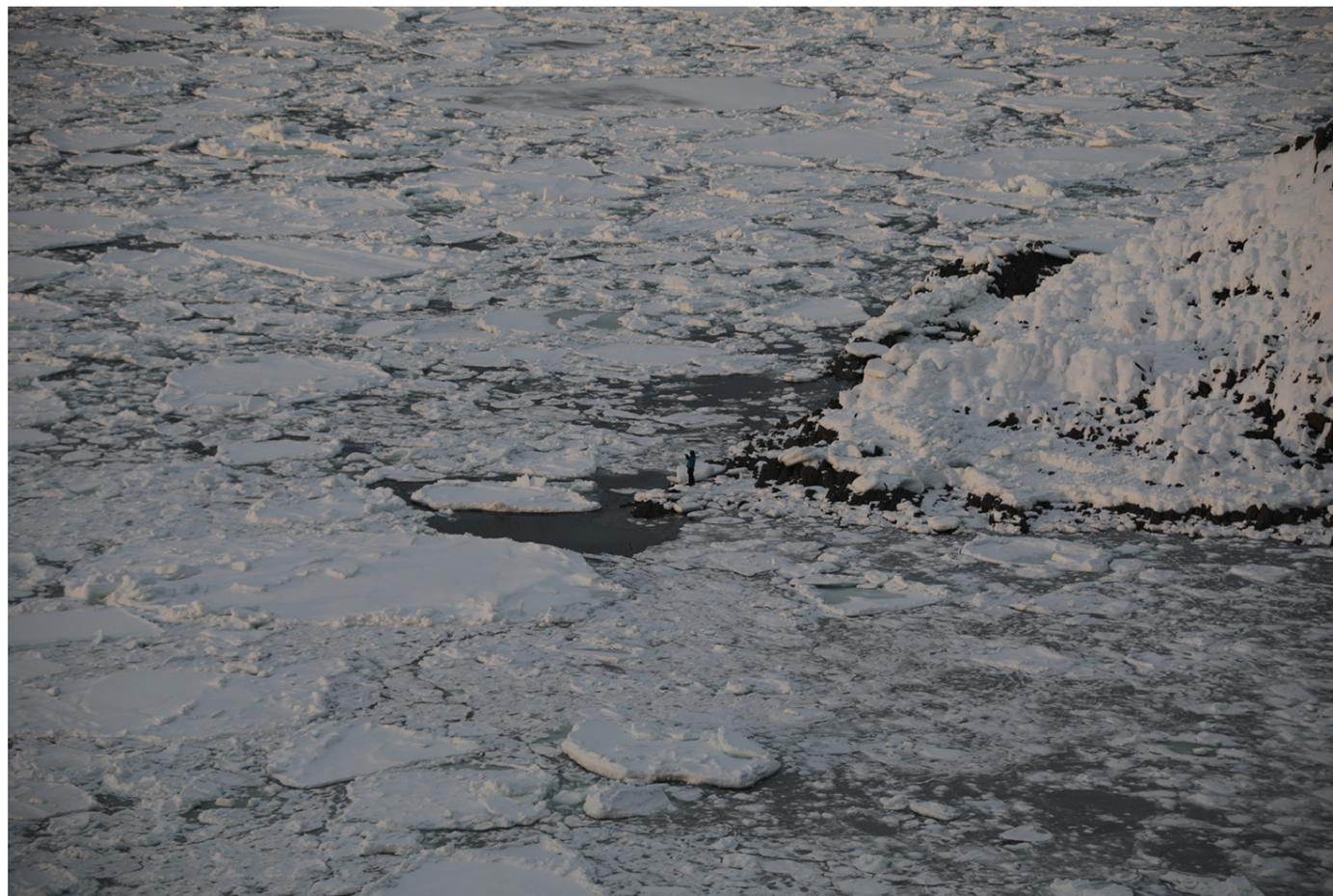
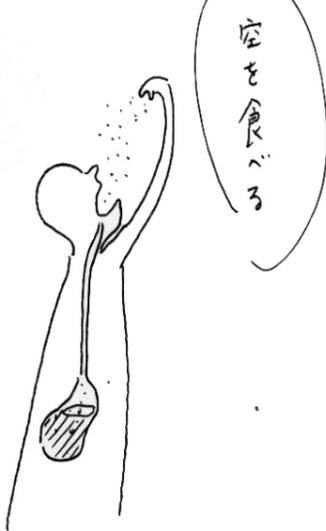
URL: http://www.yoichikamimura.com/works/eat_the_air.html



札幌国際芸術祭 2020 は、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大が続いたことにより中止となった。その代替として、参加アーティストたちによる作品プランを紹介する新たなオンラインプロジェクトが立ち上げられた。このプロジェクトは、2020年12月19日から2021年2月14日までの58日間にわたり開催された。

このプロジェクトでは、上村洋一と小金沢健人によるコラボレーションが行われた。彼らは、札幌駅北側に位置する札幌市の地下融雪槽を会場に用いた作品制作を試みた。北海道大学 CoSTEP（科学技術コミュニケーション教育研究部門）の協力のもと、上村は2019年より知床半島の斜里町でフィールドリサーチを行い、流氷が発する多様な音を録音してきた。一方、小金沢は、2019年に神奈川芸術劇場で発表した《Naked Theatre》など、空間・音・光を組み合わせた作品を手がけてきた。両者は、自然の音を含むさまざまなサウンドと照明を融合させ、札幌の冬の雪を集めて処理する地下融雪槽を最大限に活用することで、新たな空間を創出しようとしていた。オンラインプログラムでは、彼らが本来計画していた大規模な融雪槽でのインスタレーションに代わり、音響・映像素材とマインドマップを用いた映像作品を制作・発表した。

Eat the air



0° C

2016 / 2019

サウンドプロジェクト & 上映

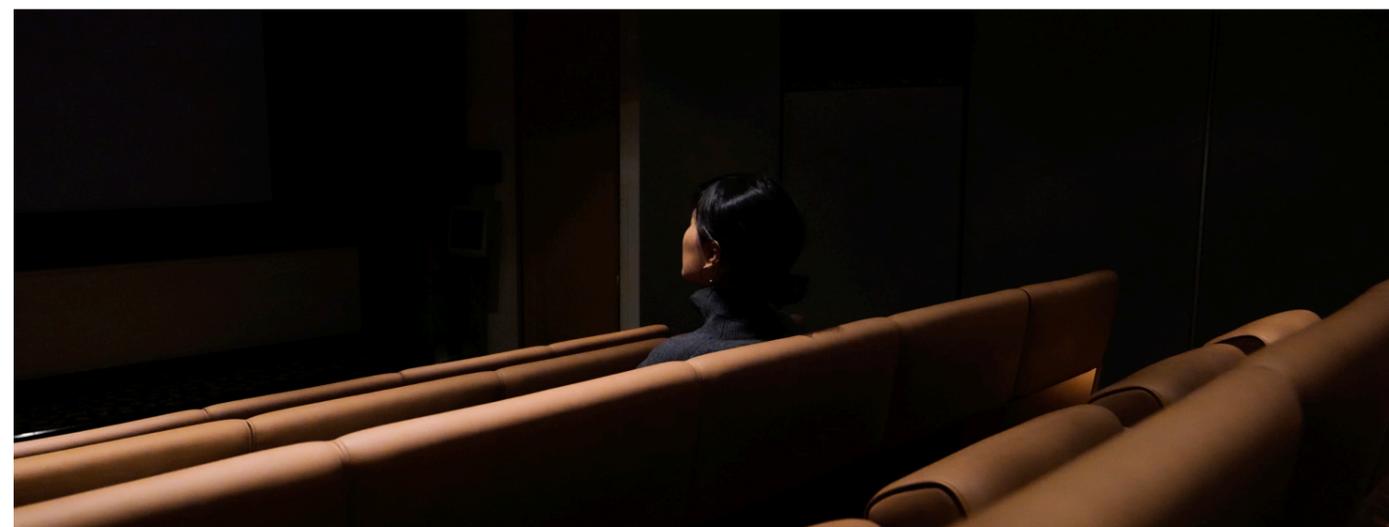
BlanClass, 神奈川 (2016) / NTT インターコミュニケーション・センター [ICC], 東京 (2019)

Co-Curation: Hideki Umezawa+Yoichi Kamimura

URL: http://www.yoichikamimura.com/works/0_2.html



Leah BEEFERMAN
Ice is a Solid
Various Locations, Svalbard / 2012, 2019



《0° C》は、上村洋一と梅沢英樹が2016年から取り組んでいる雪と氷に関するサウンドプロジェクトである。彼らは世界各地のアーティストと交流しながら、雪や氷の環境音をめぐる多様な録音、リスニング、パフォーマンスのイベントを行ってきた。南極やグリーンランドといった遠隔地の自然環境を想起させつつ、本プロジェクトは、それらが私たちの日常生活とどのように結びついているのかを観客に考えさせる。

今回は、極地の厳しい自然環境に焦点を当て、氷や雪の音を記録してきた複数のアーティストから音源を収集した。ICCシアターの5.1chサウンドシステムを舞台に展開されるサウンドスケープにおいて、流水や氷山の音は、地球規模で緩やかに、しかし確実に消えつつある自然の氷の現状を来場者に想起させる。こうした変化を音を通じて感受することは、東京という大都市から遠く離れた場所で進行する変容を想像させる体験となるだろう。それは人間の力を超える自然環境でありながら、人間の介入によって変化し続けているのだ。



Leah Beeferman
Ice is a Solid
Various Locations, Svalbard / 2012, 2019

SAKAMOTO Ryuichi
untitled
near Disko Island, Greenland / 2008

Jez Riley French
Island | fjarar - glacial objects
Fjalársíðin and Jokulsárlón, Iceland / 2015-2017, 2019

Philip Samartzis
Atmospheres and Disturbances
Eiger, Mönch and Jungfrau Region, Switzerland / 2019

UMEZAWA Hideki + KAMIMURA Yoichi
melt down
Shiretoko Peninsula, Japan / 2019

0°C December 13, 2019–March 1, 2020 ICC Theater

Organizer | NTT InterCommunication Center [ICC] Co-Curation | UMEZAWA Hideki + KAMIMURA Yoichi Design | KAWAMURA Tadao Image | © Forest 2019 Leah Beeferman



Daniel Blinkhorn
Hornbaskpollen
6:10
On an iceberg fragment,
79°36' N 12°39' E in Svalbard
15:30

氷山の一部において15:30に録音 位置:79° 36' N 12° 39' E スヴァールバル
環境音と生態音響作品のあいだの創作に熱意的に取り組むアーティストとして、私の興味の対象
にわたり、とりわけ環境音響の現象にもとづいた作曲モデルの非伝統的な研究を拡張することに専
注している。私には自分を動かす一つの基本原理がある。それは音の源泉の大切さとその継続した重要性
そして生命力や、特定の場所や空間の豊かな生態学的連続性の支持を強めたいという願望である。私は
ここからテクノロジーと有機物の媒介を目的とした数々の技術を生み出してきた。デジタル音声を処理する
様々な環境を用いることによって、私は知覚、環境音の変化や拡張、そして決して切り離すことのできな
い場所と空間の有機的な結びつきのなか存在する言葉を振り起こすことに尽力している。

これまでの参加アーティスト：
Marc Behrens, Hafdis Bjarnadottir, Daniel Blinkhorn, Jez Riley French, 藤本由紀夫, 蓮沼執太, Lily Hibberd, France Jobin, 上村洋一, 川崎義博, Francisco Lopez, 森田浩彰, Katie Paterson, Steve Roden, 齋木克裕, 坂本龍一, Philip Samartzis, sawako, 白石ゆう子, 鈴木昭男, 高橋征司, 梅沢英樹, Jana Winderen.

Open Studio at HIAP

2021

HIAP – Helsinki International Artist Programme, Helsinki, Finland

Artist in Residency Program

URL: <https://www.hiap.fi/resident/yoichi-kamimura/>



上村は2021年に Helsinki International Artist Programme (HIAP) に参加した。このプログラム期間中、彼はフィンランドの旧氷河によって形成された環境、例えば氷河の記憶としての基盤岩などを研究した。フィンランド各地を訪れ、現地の環境音を録音した。

HIAP スタジオでは、フィンランドの群島景観と日本の北海道の流氷を組み合わせたドローイングを含む小規模なサウンドインスタレーションを発表した。



Kōri no ryokō / Jäämatkailu

2025

スプリットアルバム, released by Mappa, スロバキア

12 インチレコード / デジタル

Yoichi Kamimura & Olli Aarni

URL: <https://mappa.bandcamp.com/album/k-ri-no-ryok-j-matkailu>



水は記憶をとどめることも、洗い流すこともできる。流れ、あるいは凍ること。水は命を与え、大地を形づくり、氷結した古代の痕跡は、再び溶けて音や流動へと戻ること、あるいはただ消散して姿を消すことを待っている。

このスプリット作品において、上村洋一とオッリ・アールニは、ヘルシンキの「岩の教会」テンペリアウキオ教会で行われたライブ・パフォーマンスを、それぞれ独自に再解釈した二つの作品を提示する。教会は岩盤を直接くり抜いて建てられ、自然光に満ちる空間である。氷河の風景や水の循環に瞑想的に向き合いながら、共有されたフィールドレコーディングをもとに、「氷の旅」の二つの音響的ヴィジョンが展開される。

上村洋一の広範な録音群は、このパフォーマンスの基盤をなした。特に2021年にヘルシンキ沖のスオメンリンナ島で行った録音は、この地域の地質を形づくった氷河運動の痕跡を捉えることを目的としていた。さらに、ワモンアザラシの声、京都の地下水脈、ラップランドの氷河河川の音など、上村のライブラリーからの音も浮かび上がる。「バルト海に浮かぶ小さく魅力的で穏やかな島々——そこには小さなコテージやレストランもあった——それらは日本とロシアの間に広がるオホーツク海の流氷を思い出させた」と上村は述べている。さらに、スオメンリンナ島の教会で録音されたクリスマス合唱の断片も混じり込む。《氷の旅行 (Kōri no ryokō)》と題された上村の再解釈は、世界中の氷海域に共有される未来——古代の記憶が融解し、そして完全に消え去る危機——を強調している。

一方、《Jäämatkailu》において、オッリ・アールニは同じ素材を自らのフィールドレコーディング（フィンランドのヴァンター川やスオンテ湖で録音されたもの）と共に大きく加工し、独自に展開している。「私の環境の中で、侵食のプロセスや、水が岩を削ること、そして氷河が太古に景観を覆っていたことを考えていた」とアールニは語る。そのサウンドスケープは、親密な細部と宇宙的な流れの両方に満ち、氷山の水面下深くを思わせる低音の轟きが、もはや人間の理解を超える時間スケールで変容していくことを示唆している。

ryūhyō

2025

ソロアルバム / Released by forms of minutiae, ベルリン

12 インチレコード / デジタル

URL: <https://f-o-m.bandcamp.com/album/ry-hy>



本作は4年間にわたり録音されたもので、北海道・オホーツク海沿岸に出現する「流氷 (ryūhyō)」が生み出す複雑なサウンドスケープを共有する。イタリアのヴェネツィアや米国オレゴン州ポートランドと同緯度に位置するこの海域は、北半球で最も南に流氷が見られる地域だ。流氷は毎冬、アムール川の淡水とオホーツク海の海水が混じり合い凍結することで形成され、蛇行する川の流れがやがて広大な氷原となり、海を覆い尽くす。その後、海流に運ばれ南下し、ユネスコ世界自然遺産・知床の沿岸を埋め尽くす。流氷は、栄養豊富な淡水を放出することで植物プランクトンの大発生を促し、それが魚類、アザラシ、ワシ、クジラなど多様な生物を支える、地域の生態系において極めて重要な役割を担っている。しかし近年、この季節的な生態系は年々衰退し、流氷は気候変動により著しく薄くなっている。

30年前、流氷は広く厚く、人々はその上を歩き、遊ぶことができた。地元の古老によれば、かつて流氷がオホーツク海を埋め尽くしていた頃、それは大地のように動かずに留まっていたが、しかし音を発していたという。氷原の彼方からは、人間の口笛や呼吸のような音が響き、それは「流氷鳴り」と呼ばれていた。2019年以来、上村はこの音の録音を試みているが、今の脆弱な流氷はもはや口笛を吹くことはなく、代わりに新たな喉声の語彙を響かせている。

上村の録音によって、流氷の豊かさは音を通して体感される。流氷は重なり合って漂いながら、きしみ、割れ、泡立つ声を上げる。その結果、溶けゆく氷が発する多彩な声のレンジを孕んだ、濃密なテクスチャル・サウンドスケープが立ち上がる。空中録音と水中録音を交錯させることで、このアルバムは耳を流氷の割れ目のあいだに置く。狭い空間では、潮の満ち引きに合わせて音が身体的に、グロテスクに、また気まぐれにうねり、曲名の着想ともなる。しかし、氷の悲鳴、いびき、うがいのような音だけがここでの表現ではない。流氷には誰が棲むのか？アルバム全体を通して、動物たちの声が氷の上下から響く。《shima-fukurou》では、氷のノイズの合間に、この地のみ生息する世界最大級かつ最も希少なフクロウ、シマフクロウの幽玄な声が刻まれる。《kyūai》では、氷下の水中で繰り広げられる不思議な鰭脚類の求愛行動が収められ、リボンアザラシの歌が海を正弦波のようにうねりながら満ち、この漂流する音風景の特異さを際立たせる。

《ryūhyō》において、上村は氷そのものが語る声に耳を傾けている。それは、強大でありながら薄れゆく流氷にとらわれた海岸線の物語である。これらの録音は、流氷の音響的精妙さと、その生態系の豊かさを伝えるとともに、その根源的な脆さをも浮かび上がらせる。あるいは上村は、古老が「流氷鳴り」と呼んだ奇妙な音を最終的に耳にしたのかもしれない。それは時と熱のなかで新たな声へと変貌したのだろう。なぜなら流氷は、多様な舌で語るからである。

harkening critters

2024

フィールドレコーディング・コンピレーションアルバム / Released by forms of minutiae, ベルリン

3xCD, デジタルフォーマット, A5 ブックレット

URL: <https://f-o-m.bandcamp.com/album/harkening-critters>



『harkening critters』は、フィールドレコーディングとサウンドスケープ作品を集めたレーベルによる2作目の非営利コンピレーションであり、今回は動物たちの驚異的な多様性に富む信号に焦点を当てている。

「harken」という古風な動詞（「耳を傾ける」「敬意をもって注意を払う」の意）から名づけられたこのアルバムには、世界各地の32名のフィールドレコーディストやサウンドアーティストの作品が収録されている。彼らの貢献は、動物によって生み出される数多の発声、機械的な発音、その他あらゆる音響現象に耳を傾けるものだ。

全4時間にわたり、このコンピレーションは聴き手を人間以外の意味体系や音の痕跡へと没入させる。そこには、あまり知られていない昆虫の振動音響（vibroscape）、ハンマーヘッドバットのしゃっくりのような鳴き声、ライチョウの奇妙なぐつぐつ音、ワモンアザラシの不気味な信号、アリの攻撃音、酵母のリズムへの寄り道、アマゾンカワイルカのかすかなざわめき、熱帯のカエルのとぼけた叫びなど、数多くの音が含まれている。このアルバムにおいて上村洋一は、地球温暖化により著しく減少しているオホーツク海の流水下で録音したワモンアザラシの水中鳴音を発表している。

このリリースによる収益はすべて「Friends of the Earth（地球の友）」に寄付され、以下のような長期目標の支援に充てられる。

- ・環境劣化や天然資源の枯渇を阻止・逆転させ、地球の生態的・文化的多様性を育み、持続可能な生計を確保する。
- ・持続可能な社会を実現するため、環境的・社会的・経済的・ジェンダー的・政治的な正義、人間の尊厳、人権および人々の権利の尊重を共同で確保する。
- ・企業権力と新自由主義的開発を暴き、その正当性を失わせ、解体し、政府や制度的意思決定に対する企業支配を阻止する。

Therme Vals

2023

コラボレーションアルバム / Released by Vertical Music, ベルリン

カセットテープ, デジタルフォーマット

Yoichi Kamimura & France Jobin

URL: <https://vertical-music.bandcamp.com/album/therme-vals>



このサウンド・スタディにおいて、上村はスイス・アルプスの温浴施設「テルメ・ヴァルス」の建物内外における音響と素材をリサーチした。接触音、水中音、空気伝播音による録音は、ピーター・ズントーの建築に内在する音楽性を浮かび上がらせる。

カセットのA面には上村のフィールドレコーディングのトラックが収録され、一方でB面は、カナダ人電子音楽家 France Jobin による再編集で、石・水・山々のあいだに響く共鳴とリズムを強調したトラックが収録されている。



Therme Vals でのレコーディング (2017)

Pelagos 2021-2022

2022

ドローイングブック / Published by Yoichi Kamimura

デザイン: 川村格夫

URL: <https://yoichikamimura.bandcamp.com/merch/pelagos-2021-2022>



『Pelagos 2021-2022』には、上村による水彩ドローイング、ノート、そしてフィールドレコーディングが収められている。ドローイングは、フィンランドの群島と北海道・知床の流氷とを重ね合わせた風景を描いている。

上村は、フィンランドの海に浮かぶ岩島に人々の暮らしのかすかな痕跡を感じ取り、それは地球温暖化の影響を受ける以前の知床における人々の生活を思い起こさせた。かつて人々は流氷の上を歩き、焚き火を囲み、宴を開き、はしゃぎ回っていたのである。フィンランドの風景とオホーツク海の風景は、彼の心の中でおぼろげに重なり合い、新しい風景の心象が立ち上がり始めた。その過程は、きわめて個人的な連想ゲームのようであった。

また本書には、ラップランドの凍結した川の音や知床の流氷の環境音といった、上村が録音したサウンドを聴くことができるQRコードが付属している。収録される音源の種類は、冊子ごとに異なっている。



re/ports

2022

コラボレーションアルバム, Released by Ftarrri, 東京

CD / デジタル, ドローイング

Hideki Umezawa + Yoichi Kamimura

URL: <https://ftarrilabel.bandcamp.com/album/re-ports>



《re/ports》は、上村洋一がスイス、ドイツ、台湾、日本などで録音した環境音と、梅沢英樹がモジュラーシンセサイザーなどのアナログ機材を用いて制作した電子音とを組み合わせた作品である。また、ピーター・ズントー設計の建築《テルメ・ヴァルス》における音響的反響も取り入れられている。《re/ports》は、2年間にわたる制作プロセスを経て完成した。

上村は、人間と非人間的環境との関係性を考える手がかりとしての自然現象に関心を持ち、フィールドレコーディングという方法でさまざまな環境にアプローチしてきた。その例として、世界各地の満月・新月の日における大潮の音、核廃棄物がいまだ保管されている台湾・蘭嶼の港での水中音、青森公立大学国際芸術センター青森（ACAC）のアーティスト・イン・レジデンス・プログラムにおいて風景画研究を通して収集した環境音などがある。

人間の知覚の閾値を超える解像度で録音された環境音は、人間中心主義を超えた生態系の世界の状態を明らかにする。実際、人工的に聞こえるリズムが自然現象に由来することもあれば、鳥の声のように聞こえる音が電子ノイズに由来することもある。自然物と人工物の境界は曖昧であり、第一印象では判別が難しい状況も存在する。